
はじまりの物語(仮)

紺野 水透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はじまりの物語（仮）

【Zマーク】

Z3085X

【作者名】

紺野 水透

【あらすじ】

今よりも遠い遠い昔のこと。

はじまりの世界といつものがありました。

それは神が創造し、楽園とは切り離した世界。
様々な者が生きる世界。

これはそんな『はじまりの物語』。

1・僕の姫様

ここは、とある世界のある国。
僕が仕えるのは、その国のお姫様。

「ねえ、悠詩

姫様がトテトテと歩き、近付きながら僕の名を呼んだ。
「どうしました？」

優しく訊ねてみると、姫様は片手を左手で擦りながら言つ。

「眠い…」

その仕草は小さな子供となんら変わりはなく、愛くるしい。とても愛くるしいのだ！

この姫様は15歳で、後数年経てばどいかに嫁ぐ歳になる。だとうのに、この無防備さはなんのだろう。年相応にはとてもじやないが見えない。

「では、お部屋に戻つてお昼寝の準備でもしましょつか？」

平静を努めて彼女に言つが、それにふるふると首を振つた。

今、僕達はお城の庭にいる。姫様専用の誰も来ない庭。池もあるし木も植えてある。もちろん、草花もある。それらに囲まれるようにな芝生があり、その上にはテーブルとイスが用意されている。さつきまで姫様は、大人しくイスに座つて花を眺めていた。

部屋に戻らないと言つのならば、どこで仮眠をとると言つのだろうか？

疑問に思つていると、急に姫様はトテトテと歩き出した。目でそれを追つていくと、大きな木の根元で立ち止まり、こひらを振り向いた。

「ん…」

地面に指差し、それだけ言つ。

ここに来いということだわ。それはわかる。けれど、せひと
言葉で話して欲しいものだ。

まあ、こんなところも子供の様で昔から変わらず可愛らしさのだけ
けど……。

「どうしたのですか、お姫様。睡眠をとりたいのでしょうか？」

「ここに座つて……」

僕の問いは見事に無視された。

「……姫様？」

「座つて」

訝しんでも態度は変わらず、ただ同じ言葉を繰り返す。

どうやら聞く耳を持つてくれなさうなので仕方なしにその場に座ることにした。軽くため息を吐きながら、大木に背をもたれかける。

「これでよろしいですか？」

「ん……」

姫様は言つて、それからストンと僕の隣に座つた。そして……

「…またですか？」

「悪い？」

僕の脚に小さな頭を乗せて寝そべる。

「いつものこと。なのに、なんで今さらそんなことを言つの？」

眠たそうな顔で無邪気にそんなことを言つ少女。本当に15歳か？と訊きたくなってしまった。こう、もう少し異性に対して警戒したりとか……実際されたら、僕は立ち直れそうにないけど……仮にも姫様なのだからいろいろ自覚して欲しい。

「あのですね、姫様……」

「成悠」

軽い小言……いや、説明をしようとした僕の言葉を遮つて、姫様は呟いた。

「わたしは成悠。『姫様』じゃない。『成悠』よ
「しかし……」

「ここに、他に人は来ない。聞かれることも無い。それでも、名を呼んでくれないの？」

悲しさが滲んだ声で姫様は言つ。僕がそれに弱いのを知つていて、彼女はやつているのだろうか。

「……成悠様、もうそんな歳ではないでしょ？」
「呼び捨にして。様付けきらい。それと、歳は関係ない」

いやいや、大有りです。

そう反論したいが、この少女は聽かないだろ？。きっと「だからなに？」と無表情で返されてしまう。

もちろん無視することだつて出来るだろ？が、相手は姫様だ。それ以前に、僕にとつてとても大切な人でもある。その人の悲しそうな顔は見たいと思えない。

だから、付き合うしか道はないのだ。

「成悠、いいですか？一国の姫様が、それもお嫁に行く歳になつた女の子が男性に引っ付きながら寝ていたら誤解されるんですよ。わかつていてやつています？」

「……」

「成悠、返事してください」

すー：

返事の代わりに可愛らしい寝息が聞こえてきましたよ？

狸寝入りなのでは？と言いたくなるが、本当に寝ているため何も言えない。というか、眠りにつくのも早すぎです。

「はあー……」

また、ため息を吐いてしまう。
いつもこうなのだ、成悠は。

幼い頃からずっとこう。毎になると眠いと言い出し、葉が生い茂

つた大木の下で僕の足を枕代わりにして眠りにつく。

いくら人が来ないからといって、外でこれはやめて欲しい。万が一、誰かに見られてしまった時が大変だ。

お叱りを受けるのはまだ良いが、成悠から僕を離そうとされるのは困る。僕が離れたくないというのももちろんある。僕が離れたくないというのももちろんある。けれどそんなことより、純粋で無垢な彼女が僕というちつぽけな支えを失うだけで、平穏に保っていた心を崩してしまったかもしれない可能性があることの方が怖い。

だから、それだけは避けたい。

「…成悠…」

寝ている彼女に呼びかける。当たり前だが返事は返つてこない。それでいい。深く眠れるのは、それほど安心して寝ているということだ。

そんな少女の長く柔らかい髪を優しく手でとかしながら、願う。

どうか、いつまでもこのままで……

いつか僕の手から自ら離れるまで、僕は君を守りつ。誰からも、何からも。

だから、それまでは

君の傍に居をせて。

2・1・姫様と魔女。

薄桃色の花が咲く。

つい最近まで薔薇だつたその花は今まですっかり咲き誇り、華やかさの中にある儂げさが見る者を魅了していた。

「あ……」

「どうしました？姫様」

食事をしている中、急に動きを止めて何か呟いた姫様。そのまま身動きをしないで一点をジッと見ている。

何があるのだろうと思い、彼女が見の方を一緒に見てみると、そこからは薄桃色の小さな花がついた薔薇が木々に巻き付いているのが見えた。遠目からだと、その花は木から咲いているように見えなくもない。

「綺麗……それとも、可愛らしい？」

変なところで悩む姫様。そんな様子に、貴女の方が何百倍も綺麗で可愛らしくですょと言いたくなる。が、もちろんそんなことは言わない。

代わりに、優しく微笑んで助言する。

「どちらでも良い」と思っていますよ。思つ」とも考へることも入それぞれです」

「…なら、悠詩は？」

「僕ですか？」

突然の問いかに、一瞬思考が止まつたが、回復するとすぐに答えた。「あの花を姫様の御髪に飾れば、さぞかしあ似合いになるでしょうね」

淡く輝く銀色の髪に薄桃色の儂げで可愛い花。絶対姫様に似合つと思う。

「それは花に対するの感想じゃ、ない」

聞きたかった答えとは違つたようで、姫様はムツとした表情で僕

を見る。しかし、その頬はよく見なくては気付かないほどに淡くだが、紅に染まっていた。

その姿が実に微笑ましい。

「姫様、そんな無粋な奴の意見なんて聞いても何の得にもなりませんわよ」

姫様と楽しくお話をしていたというのに、いらない声が聞こえる。いつの間に部屋に入ってきたのか、気配も感じさせないまま僕の背後にそいつはいた。

「都夜、久しぶり」

驚きもせずに、姫様はその客人？を迎える。もう少し、侵入者に危機感とか嫌悪などを感じて欲しい。

一方、侵入者はそんな姫様に艶やかな笑みを向ける。

「お久しぶりですわ、姫様。今日も可愛らしく美しいお姿です」と

「都夜も変わらない。というか、本当に昔から変わらない」

「魔女ですから。人より寿命が長い分、老いるのが遅いだけですの」サラッと衝撃的なことを言つ侵入者は、本人が言つた通り“魔女”である。

”名前は都夜。

幼少の頃からこいつを見ているが、姫様が言つようになつて変わらない。美しく凜とした顔立ちも、漆黒のように黒く艶やかな髪も、その魅惑的な身体つきも、嫌みつたらしい言い方も。全て変わつていない。

「姫様は美しさが増していきますわね。少し前まではあどけなく可愛かつたですのに」

「…そう?よくわからない」

都夜の言葉に姫様は首を傾げる。自覚が無いだろうその仕草は、悶え死にができそなくらい可愛い。実際僕の心中では一回死んだ。もちろん、その死に悔いはない!むしろ、本望だ!

……と、少々取り乱してしまいました。

まあ、これには都夜も同じじらしく、普段は涼やかなその顔がほんのり紅くなっていた。

「あー…。前言は撤回致しますわ」

「？」

片手で顔を隠す彼女を見ても姫様にはその理由がわからない。ただし紅くなつた顔を見て、心配そうに下から覗き込んだ。

「大丈夫？ 都夜？」

「つ…！」

急に至近距離で姫様のお顔を見た都夜は思わず飛び退いた。それが逆効果だったとは知らずに姫様はまた首を傾げる。

「悠詩…。都夜は、どうしたの？」

「えーと、まあ、ほおつといてください。姫様は気にしなくて平気ですよ」

平静を装つて対応している僕は偉いと思う。世話係という役職でなければ、僕も都夜と同じ行動をとつていたかもしれない。それくらい、この姫様は可愛らしいのだ。

そして天然。純天然。何も混ざり気のない彼女は、いつか本当に誰かを悶え死にさせておかしくはない！まあ、もちろん、人目の着く場所に連れて行く気はさらさらないが。

だつて、嫌ですよ。万が一連れ出して悪い虫が寄つてきたら… 考えるだけで、想像上の奴らを皆殺しにしたくなる。

「……姫様…」

僕が想像をしていた間に都夜は自分を取り戻したらしい。若干まだ不安定であるが大丈夫だろう。あとは姫様が追い打ちをかけなければいいけど……なんて考えは甘かつた。

「なつ！」

僕は思わず声を上げた。

都夜が急に姫様の体を抱き締めたのだ。姫様は身動き一つせず、されるがままである。

「都夜、わたし何かした？」

ただ不安そうに訊く。

もしかして、自分のせいで相手に害を及ぼしたのでは…と思つているのだ。

それをわかっている都夜は姫様の肩に顔を埋めたまま、首をゆつくり左右に振る。

「そうではないですわ。姫様が思つているようなことではありますん。」安心下さるませ

「本当に？」

「ええ。むしろ、お可愛らしくて……つい我を忘れてしまって」

「…よくわからない。けど、わたしのせい？なら、…」めんない？」

「ふふっ。やはり、姫様はお可愛らじいですわね。美しくもなつていらっしゃるのに、何故かしら…？」

優しく抱きながら、抱かれながら和やかに過ぎる時間。はたから見たら、微笑ましい光景だらう。

だが、僕からすれば面白くない。なぜ、僕の姫様が僕以外の誰かに抱かれなくてはいけないのだ。

「都夜様、そろそろうちの姫様から離れてくれます？」

なんて内心は隠しつつ、丁寧ににこやかに言つてみる。

な・の・に

「私達の邪魔をしないで下さります？下等生物の分際で」

都夜は何か汚らしいものを見るような目で、蔑むような口調で言つてくる。

「死ね。マジ死ね。つてか、殺したい。」

なんてこと思つてませんよー?といつアピールで笑つとく。笑うのだけは得意だ。

少しばかり頬が引きつってる感はあるが、気にしない。

「都夜」

さつさまで身動き一つしなかつた姫様が、急に都夜の腕から離れた。

「どうなさいました?」

不思議そうに訊ねる都夜にも姫様は返事をしなかつた。

どうしたのだろうとその様子を眺めていると、次いで僕の方へ小走りで向かつてくる。

ぱすっと僕に頭を押し付け、両腕を腰にまいて抱きつく形。僕の胸あたりまでしかない身長のせいで、自然と姫様の顔は胸に埋まる。

「どうしたのですか?姫様」

一人から殺氣立つた視線が突き刺さるが、軽く受け流す。代わりに、うるさいくらいに鳴る心臓の音が聞こえなきやいいなあと思ひながら、平静を努めて話しかける。

だといつのに、

「…都夜、きらい」

小さな声で姫様はそんなことを言つてぐだつた。

「都夜、きらい」

そう言つたまま、顔を隠すように僕に抱きつく姫様。もちろん聞こえていたのだろう、嫌われた人物は半ば自失している。姫様を溺愛している彼女に、その言葉は鋭く尖った刃物のように突き刺さった。たぶん、僕が同じ言葉を言われてもあまりのショックに茫然としていたと思う。そんな自信がある。

まあ、都夜に同情する気は全くないですけどね。

それでも

「どうしてですか？」

聞いてやらねばいけない。

姫様が人を無闇に嫌うような人間になつてほしくないという世話係としての思いと、純粹に彼女が人に……それも都夜に「きらい」と言つるのが珍しいからだ。

姫様はぎゅっと抱きついたまま呟く。

「悠詩は悠詩。かとうせいぶつ、なんて名前じゃない。悠詩の名前、間違つたからきらい」

まるで駄々つ子のように拗ねる姿も可愛らしい。

なんでしょう、この子。なに言つてくれるんだろー出来れば、思いつ切り抱き締めたいです！

…おおつと。僕も危うく我を忘れるところでした。

だつて、僕のために姫様が都夜に「きらい」と仰つてくれたのですよー？そりやあ、少しぐらいタガが外れそうになりますさつ！

見た目は普通に内心はテンションが上がっている僕に反比例して、嫌われた人のテンションは見た目で判るほどに落ちていく。

「きらい……姫様が嫌いって……私のことを……きら、いつ

て…

ああ、ウザい。

陰鬱な空気を撒き散らしながら、都夜は途切れ途切れ言葉を口にする。

もちろん姫様は顔を埋めたまま、彼女の方なんて見向きもしない。そんな2人を見て、僕は気付かれないようにため息を一つ吐いた。個人的には放つておきたいのだが、そうもいかない。ずっとこんな調子のまま都夜に居られても困る。それに、この陰鬱な空気を何かしたい。姫様に悪影響だ。

だから

嫌だけど、僕が一肌脱いであげるしかない。

「…姫様」

「なに…？」

「都夜様を許してあげてください」

「…イヤ」

少し怒り口調で呟く姫様。

うーん、こいつは姫様つてメンンド……いや、大変なんだよね。あんまり言い過ぎると、意地張つちやうから。仕方がない、こいつは何かでつらつか…

「姫様…」

「イヤ」

まだ言つてないのに即答だよ。どうしよ？

これは結構怒つてゐるのかな？僕のために？都夜が僕のこと下等生物とか言つたから？…もしそうなら、やっぱり嬉しい。

「成悠」

自然と優しく彼女の名を呼ぶ。不意打ちを受けた成悠は、ピクッと体を揺らした。僕から名前を呼ぶことがこの頃なかつたからかな

り驚いただろ？。

わかつてゐるけど、知らぬふりをした。

「成悠、僕は気にしていません。ですから、都夜を許してあげてはくれませんか？」

「……」

「お願いです。許してあげてください」

「……」

僕の胸に顔を埋めたままの成悠。決して無視しているわけではない。こう見えて、彼女なりにちゃんと考えているのだ。

その証拠に……ほら、少ししたら顔を上げた。

「けど、悠詩が蔑まるのはイヤ

ムツとした口調で、けれど少し悲しそうな目で僕を見る。捉えて離さないその目の色は髪よりも少し薄く、銀色というか灰色に近いかもしない。透明っぽくて綺麗な瞳。全てにおいて色が薄い彼女だが、無駄に強い想いと意志を持つている。

「なら、そう言わないでとしつかり伝えればいいでしょう？…さつきも言いましたけど、僕は気にしていません。ですから、後は成悠次第ですよ」

「……」

成悠はまた黙りしてしまった。

暫くの沈黙後、微かな温もりが離れていく。それは彼女が僕から離れたから。

「都夜

未だ沈んだままの都夜に、姫様は声をかける。感情を消した声で。

「…ひめさま？」

呼ばれた方は、少し色の戻つた目で姫様を見た。それからハッキリと姫様は言う。

「都夜、嫌い」

「…はい」

断言されでは、都夜も返せる言葉がそれしかない。死刑宣告を受けた咎人のよう、ただうなだれる。

だが、そんなこと気にせずに姫様は言葉を続ける。

「都夜なんて、嫌い。けど、好き。悠詩の名前、間違えないようこするなら、また好きになる」

「…それは…」

「ダメ？」

気が付けば、いつもの姫様の聲音。それを聞いて都夜はすぐに首を振る。

「いいえ。以後、気をつけますわ

ゆっくりと歩いて都夜のもとへと近づいていく。そして、今度は姫様の方が彼女に抱きついた。

「じゃあ、好き」

「私も姫様をお慕いしていますわ」

嬉しそうに抱きつく姫様と幸せそうに顔を綻ばせる都夜。言つちやなんだけど、母と子の抱擁にも見えなくもない。ある程度の誤差はあるだろうが、お互いを想う気持ちは似たものなのだろう。

けどやっぱり、僕からすれば面白くない。そりやあもう、とてつもなく。

だからといって、僕だって自分の我が儘を通すだけの子供じゃない。邪魔はしないぞ。うん。しない。したくないんだけど……

「そろそろ離れてくれません?」

さすがにずっと待てるわけ、僕の心はぐくはないのです。

3・1・姫様と婚約者。

「よお。成悠」

雨降る曇下がり。珍しく部屋の中にいた姫様のもとに、一人のお客様がやって来た。

それまで窓から外を眺めていた姫様は、ゆっくりと客人の方を見る。視界に捉えた瞬間、動きを止めて「じー」と彼を見た。どうしたのでしょうか。姫様は微動だにせず、部屋に入ってきたいさつをした青年をただ「じー」と見ているのだ。まるで、知らない何かを見る子供のように。

そして数秒後

「……だれ？」

首を傾げてそう言つてくださつた。

その仕草はいつも通り可愛らしい。抱き締めたくなるくらい可愛らしい。……可愛らしいんですけど……

「……自分の婚約者くらい覚えていてください、姫様」
さすがに婚約者ことを忘れてしまわるのは問題です。下手したら国際問題にもなってしまいます。

人の気も知らない姫様は、僕の方に顔を向けてキッパリと言つ。

「めんどうくさいから、イヤ」

イヤ、じゃありません。ちゃんと覚えておいてくれないと困ります。

「んー、せめて本人がいない時に言つてくんないかなあ。脈無しだつて知つても、さすがに堪えるぞ？」

ほら、忘れ去られてしまつていた婚約者様が苦笑いをしているではありませんか。僕には「ご愁傷様」としか言いようがないです。どうしてくれるんですか！フォローなんて出来ませんよ！

……半分くらいは、ザマーニロとか思つてたりしなくもないですけどね。もちろん「ご愁傷様」もにこやかに言つてやりますよ。

僕の心の叫びも黒い声も聞こえていない婚約者様……改め、久炉様は目尻を若干下げて姫様を見ている。

「……相変わらずだな、成悠は」

なんだかしみじみと、妹を見る兄みたいな穏やかな顔で言う久炉様。こんなことで懐かしそうにして欲しくはないけど、仕方がないですね。ないですよね！

……紹介が遅れました。姫様の婚約者様のお名前は久炉様。当たり前かもしだれないですけど、他国の王子様です。歳は姫様の三つ上で、やんちゃな所は残っているけどちゃんと立派な王子をやつている。素は子供っぽいが、外では落ち着いていて賢い王子様。國民らの人は望だつて厚い。

そんなお方が自分の婚約者に「だれ？」とか言われたのです。個的には嬉しいけど、お世話係としては申し訳ない限りです……。

彼は優しい目で姫様を見る。まるで実妹を見ているような和やかな雰囲気で。

その様子を見ていて、ふと思いつくことがあつた。

「そういえば、珍しいですね。久炉様がこんなに長い間、姫様に会いに来なかつたなんて」

形だけの婚約者とはいえ、マメな王子様は週に一回程は姫様の元へ来ていた。だといふのに、彼を最後に見たのはひと月も前だつたような気がする。

僕の質問に、久炉様は何か濁すような言葉で答えた。

「まあ……いろいろあつてな」

将来は一国を担うことになる王子だ。いろいろあるのは仕方がないだろう。

けど

「あまり」無理をなさらないように。報告は後で伺います

「ハハツ、手厳しいな」

乾いた声で笑う久炉様。何が手厳しいのでしょうかね？

情報はきちんと聞かなくては命とりになる。例え、些細なものでもそれは同じ。まわりからは些細と言われたものでも、自分達にはどういうものになるのかわからないのが“情報”といつものだと僕は思っている。

「…ところで、悠詩

急に茶目っ気が入った顔で僕を見る。やめて欲しいです、その顔。別に僕はそんな趣味は持ち合わせていないので、そんな目で見られても可愛いなど思いませんし、トキメキません。むしろ、嫌な予感しかないです。

「なんでしょうか、久炉様？」

「んー？その敬語と様付け、なんとかなんねえのか？」

「僕はしがない使用人ですよ？一国の王子相手に呼び捨てなんてとんでもない」

「いつつも呼び捨てだし、バカ王子とか言つくな！」

「姫様の手前、そんな下品な言い方はしませんよー」

「うわー、とぼけもしなきや、弁解も無しかよ……」

疲れたようなその表情に、僕はにっこりと笑みを返してやる。

当たり前じゃないですか。可愛い可愛い姫様には悪い言葉遣いは覚えてほしくないですからね！

「…幼女趣味」

「ああ？何か言いやがりましたか、久炉様？」

「なつなんか、微妙に言葉遣い混ざつて恐えんだけ……」

彼の頬が何故か引きつる。

失礼ですよ、人に向かつて恐いだなんて。それに、姫様に向かつて幼女だなんて。身なりはこんななんでも、今年で立派に十六になりますっ！

「…両方共、ヒドい」

不機嫌丸分かりの顔と声音で姫様が言った。その声は大きいわけでも、極端に低いわけでもないのに、何故か寒気がする。

「どうぞ、ました？」

「幼いつて言つた」

責めるような口調で言い、僕を睨みつける姫様。

かつ可愛い……はずなのに、少し恐いですよ……？

「幼い女といったのは久炉様で、決して僕ではありませんよ？」

「悠詩も、言つてないけど思つたでしょ」

「わー。恐いですよー。なんで僕の考えを読んでるんですかっ。

「ウソは駄目」

「いや、姫様……？」

「『めんなさい』は？」

「……『めんなさい』」

つい迫力に圧されて謝つてしまつ。だつて恐いんですよ。何故か恐いんですよ。

けれど幸い、謝つたおかげか姫様は機嫌を直してくれた。「ん

と言いながら満足気な顔をする。

子供っぽいのはうちのお姫様もだけど、そこがまた可愛らしいのです。素直でいいですね。

どこの久炉とかいう馬鹿王子様と違つて。

3・2・姫様と婚約者。

半ば蚊帳の外にされてしまった久炉様は、おずおずと姫様に話しかけた。

「成悠…？」

「なに」

決して本人は見ずに冷たい声で答える姫様は、やっぱり少し怖い。意外と迫力出るものですね。

「…怒つてるか？」

「怒つてる」

即答で返す姫様はまさに不機嫌です！といった感じだ。早く謝つておいて正解だつたかもしねり。

たじたじな久炉様を見つつ、僕は自分がした判断は正しかつたと内心褒め称えた。

「悪かつたつて。別にお前に對して言つたわけじやあねえんだ。ちよつと悠詩をからかいたくて……」

「けど、わたしを指した言葉だつたんじやないの？」

「いやー…」

「意味のない弁解はきらい。『めんなさいって、一言いえばいいのに』

フンッと姫様がそっぽを向く。久炉様は參つた感じでため息を吐く。

「…」言つたのは確かなのだから、せつと謝つてしまえばいいのに。そういながら、呆れた視線を久炉様に送る。この王子様は謝ることがどうも苦手らしくて、いつもこんな感じでうだうだするのだ。見ていて一発殴りたくなるが、姫様の手前、そんなことも出来るはずもない。

「…」「めん。悪かつたよ」

黙りをしてから数秒して、やつとで久炉様は謝罪を口にした。すまなそうな顔をしながら、そっぽを向いたままの姫様を見る。そんな彼をチラツと見やつてから、聞こえるか聞こえないかの声で言う。

「…許す」

姫様から許してもらひことができ、安堵する久炉様。けれど、そんな気持ちもあつと、いう間に消え去つた。「けど…」と姫様が言葉を続ける。

「また言つたら、都夜に言いつけるから」

「…」

一瞬、久炉様の動きが止まつた。姫様の一言は彼に大打撃を与えるものだった。

「えーと…成悠、さん? 何を…」

「都夜に言いつけるから」

「あ、のー…」

しじろもじろの久炉様に、姫様は繰り返す。

「言つたら、都夜に言いつける。言わなかつたら、言いつけない。わかつた?」

「…はい」

反論することなく、久炉様は頷く。頷くしかないのだ。

都夜は姫様を溺愛している。そんな彼女に姫様が告げ口した場合、久炉様はお仕置きをされるだろう。得体の知らない魔法というものを使う魔女。ただの人間である久炉様はそれに抗える筈もない。

「…まあまあ、姫様。それくらいにしてあげてください」

さすがに可哀想になつて僕は声をかけた。彼が都夜に告げ口をされたくないもう一つの理由を考えると、これ以上言つるのは可哀想以外のなにものでもない。

僕の言葉に姫様はコクンと頷く。

「わかつた」

そんな彼女が可愛くて、つい抱き締めたくなつてしまつ。

ダメダメ。僕はあくまで姫様の世話係であつて、婚約者とかじゃないんだから。

心の中でそう言い聞かせる。自分で自分を諫めるのも馴れたものだ。日頃から暴走しないように自制しているから、そのお陰かもしれない。

頃を見計らつて、僕は口を開く。

「姫様、少し席を外してもよろしいですか？」

「どうして…？」

急に不安げな表情になる姫様。そんな顔を見たら、ずっと側にいたくなつてしまつ。

「久炉様と大切なお話があるのであります。退出の許可をいただけますか？」

「…？」

「帰つてきたらたくさん遊びますから」

「…わかった」

数拍置いて渋々承諾してくれた。顔を伏せてしまつていて表情は窺うことはできなかつたが、きっと寂しげな目をしていることだろう。

申し訳ない気持ちがあるものの、ここで甘やかしてはいけない。

それは姫様へ対してもだが、自分に対してもだ。

「久炉様も少しの間付き合つていただきます。もちろん、よろしいですね」

「訊く気無いだろ。ほほ断言じゃねーか。…別にいいけどさ」

しおぼくれる久炉様を軽く流して、姫様を見る。まだ下を向いてしまつてゐるが、挨拶をする。

「では、いってきますね」

「…悠詩」

ドアノブに手をかけたとき、姫様が僕の名前を呼んだ。見ると、

伏せてあつた顔が上げられていて、薄い灰色の瞳が僕を見つめていた。

「どうしました？」

訊いてみても直ぐには応えてはくれなくて、少しの間沈黙が空間を支配した。

そして

「…いつてらつしゃい」

僕に心配をかけないようにするためか、軽く笑って言つてくれる。その表情が、そんな顔をさせるのが少し痛くて……、けれど僕もいつも通り微笑んで返事をする。

「はい。いつてきます、姫様」

そうして部屋を後にした。

余談

「…大袈裟じやねえか？」

部屋を出てすぐ、久炉様があからさまに呆れた声でそんなことを口にしたが

「…げふうつー！」

みぞおちを強打して、黙らせておいた。

口にしないほうがいい言葉はこの世にたくさんあるんですよ、久炉様？

「それで?何があつたんですか、久炉」

「…お前、本当に成悠の前と俺の前で態度違つよな」

なにが良くなかったのか、久炉はジト目で見てくる。

ここはお城の中の一室。一応与えられている自室と言つた名の空き部屋に僕達はいた。

「お前…、ですか。たしか姫様のこともそのように呼んでましたね」僕のその言葉に、久炉はビクリと体を揺らす。おかしいですね。僕は笑つていてるというのに。何に怯えているのでしょうか。

「どうしたのですか?久炉様」

「つ!わつわかったから。悪かつたの俺だから!その笑いやめてくれつ!」

ヒステリック気味に久炉が騒ぐ。仮にも一国の王子なんだから、もう少し落ち着いてほしいです。みつともない。

「ハイハイ。…全く、僕が何したと言つんですか。そんなに怯えてため息混じりに言つと、久炉様は恨めしげな目で見てきた。

「今まで散々してきたじやねーか。しかも、笑いながら。骨折させられたのも、縄で逆さ吊りにされたのも、一週間意識不明にされたのも……忘れてねえぞ…」

「なあに言つてているんですか。あんまりつるすこと、その口縫いますよ?」

「だから、笑いながら言つなつついにつ!」

軽く半泣きで叫ぶ久炉。情けないですよー。一国の王子が自分より年下の従者に怯えるなんて。

確かに、訓練と称して骨を折つてみたり、姫様に対しての言葉遣いが悪かつたら縄で縛つて宙吊りにしたりしましたけど……大したことないですよね?

「まったく、冗談ですよ。さすがにそんなことはしません

「…糸と針を持ちながら言つても説得力ねえって…」

「やりませんつてば。縫つてしまつたら“情報”を聞けないでしょ。まあ、話す気が無いなら縫つてもいいですよ」

「そういう問題つー?」

当たり前じやないですか。じやなきや、何のためにわざわざ姫様から離れてまで久炉と話をするというのです。

「…まあ、今に始まつたことじやねえしな…」

「そうですよ」

「開き直んなつつ！」

「うるさいですねえ。認めて何が悪いのですか。面倒くさいのは嫌いなんです。

「そろそろお話を聞きたいんですけど。早くしてくれませんか。じやなきや、困るのはあなた方ですよ」

僕がそういう瞬間、久炉様の体がピタリと動きを止めた。息を詰ませ、顔を若干青ざめさせている。

動きも言葉も無くして数秒後、真剣な顔つきで久炉様は話し始めた。

僕にとつて、とつもなく面白くない話を。

*

部屋に戻つた僕をわざわざ姫様は迎えてくれた。

「ゆたつー！」

トテテテと走つて飛びついてくるそれを優しく受け止める。可愛い可愛い僕のお姫様。本当は抱き締めたいけれど、我慢しなくてはいけない。

「只今戻りました」

「おかえりなさい、悠詩」

顔を僕に埋めたまま“おかえりなさい”を言つてくれる。それでも嬉しい。すぐに離れてしまうのだつたと思い、その幸せを密かに噛みしめていた。

けれど、それからしばらくしても姫様は僕に抱きついたまま離れなかつた。

「…姫様？」

心配になつて名前を呼んでみると、少しだけポソリと呟いた。

「久炉とのお話、なんだつたの…？」

不安そうなその声が少し痛い。心配はさせたくないのだけれど、なんて思いながら苦笑する。

「姫様は気にしなくて平氣ですよ。大したことのない、他愛もないお話でしたから」

「…けど、不思議。怒つてゐるのに泣いてる。悲しんでる」

まるで独り言のように言葉を紡ぐ姫様。

それを聞いて、僕は姫様の手を自分の腰からほどき彼女の目を見る。そして「ああ、用心しておけば良かつた」と反省する。…もつ遅いけど。

「姫様、感情を勝手に読まないでください」
「だつて……きこえる」

悪びれずにボンヤリした調子で姫様が言つ。きっと無意識に力を使つたのだろう。虚ろな目がその証拠だ。

そして、強い力は使つた人自身の身に負担をかける。

「…ゆ、た……」

僕の名を呼んだと思つたら、急に体の力が抜け、人形の糸が切れた様に

カタシッ

と体が崩れた。

それを反射的に受け止める。もちろんどこも打ちつけることもな

く、僕の腕の中に姫様の体が収まっている。

「おやすみなさい、姫様」

眠りについた姫様を壊れ物を扱うように優しくそっと抱きしめながら、僕はそう呟いた。

愛しい愛しい僕の姫様。

ベッドに寝かせた後、脇にある椅子に腰掛ける。そして眠る姫様を見つめながら、さつきまで一緒にいた久炉との話を思い出す。とても面白くない世間話。

*

「またこの頃、巫女狩りが増えてる」

俯いた久炉が何かに耐えるように言葉を吐き出す。その様子を静観しながら、僕は口を開く。

「…巫女狩り、ですか」

「ああ。各國の巫女たちが何者か達に攫われてる。攫われた巫女は生きて連れ戻される者もあるが……」

「殺される者もいるのですね」

久炉が言い淀んだその言葉をサラッと僕が言うと、彼は苦々しい顔で「そうだ」と頷く。悔しそうで辛そうな顔がまる見えである。もつと表情を隠す力を身につけた方が良いだろうなとか考えながら、彼の性格や性分を思い出す。

彼は少しばかり純真過ぎる。一国を担う王子だ。血なんて幾らでも見ることになるだろう。なのに、死に対することに弱すぎる。ただ言葉にするのを躊躇うし、自ら誰かの命を消し去ることをしない。いや、彼には出来ないのだろう。臆病なかも知れない。怖がり

なのかも知れない。もしかしたら、人が良すぎるせいかも知れない。

けれど、そんなことばかりで楯なんて造れるはずがないし、久炉の問題であつて僕には関係ない。だから僕は気にせず彼の嫌いな言葉だろうと、必要なら口にする。正確な情報を知るためにだ。

「巫女攫いは数年前にその組織を潰したはずですが？」

前に起きたものは、巫女の力に惹かれた輩が、それを自分の思う通りに使いたいという欲に駆られたためにあつた事件だ。

この世界の巫女は神を祀り、祈り、そして力の一部分を授かる。力といつても様々で、大きく三つに分けられている。

一つは天。風や光の能力に長けている。

二つ目は地。植物や地中の動きなど。

火と水などもあるが、その細かな力の種類で天か地に分けられる共通な力である。

そして三つ目は人。字の如く、人というものに関してだ。

特別な巫女の力。それを手に入れようとした馬鹿な輩がいた。各地から巫女を攫い、人体実験などを行つたバカ共が。おかげでその年は巫女たちがほぼ死んでしまい、早々に代替わりを強いられた。けれど、そいつらの息の根は全て止めたはずだ。まだ生き残りがいるとは思えない。

すると久炉が「違う」と否定する。

「前にやつた奴らは全滅している。今回はまた新しい派だ」

「学習しませんね。人間つて。一つ潰しても、また一つ増える」

これではいつまで経つても、いたちごつこのように終わらない。

犠牲が増える一方で、自分達すら追い詰めているということに気が付かないのでしょうか。やっぱり醜いな、欲が強い人間は。

冷めた目で見ている僕の思考がなんとなくわかったのだろう。やりきれなさそうな顔で久炉は言つ。

「違うのは派だけじゃない。目的もだ」

「目的…？」

巫女の力の私的利用ではないというのか。……では、何のために？

疑問が疑問のまま渦巻いていた方が良かつたかもしない。その方が幾分気が楽だ。

なのに、思いついてしまった。巫女狩りの目的、一つの可能性を

……

「今日は……」
ああ、嫌だ。勘違いであつてほしい。聞きたくない。言わないでくれ。言つな。

渦のようになにに感情や言葉が僕を飲み込み支配する。少しでも気を許したら、思つていることを全て子供の吐き出しそうだつた。

その中、僕の内情なんか知らない久炉は言葉を続ける。一番聞きたくない言葉を、彼は口にするのだ。

「“巫”ではなく“神”。本当の狙いは“神子”だ」

5・1・神子と巫女と姫様

むかしむかし、神様は色々なモノをつくり出しました。

まず土を地面をつくり、その次は水、草や木などの植物と呼ばれるもの、獣、天使、そして人間。生活というものができる環境をつくり、それらを住まわせてみました。

少しして、仲良く共存しているそれらを見て大丈夫だと思った神様は、自らの住む楽園から切り離し、一つの世界をつくりました。全てが共存し生きる世界。

神様が創造し、最初につくった世界。

そこは“はじまりの世界”と呼ばれています。

それは古の物語。

この世界は神がつくり、そして今も自分達を見守つてくださつて いるという言い伝え。

*

神が見守っていると言われるこの世界には“巫女”がいる。

巫女は神を祀り、仕え……特殊な力を分けてもらう。その力は私欲のためには使えず、この世界のために使われる。立場的に神に近い者であり、たくさんある中の一つの能力の守り人みたいな役割だ。能力の数ほど巫女はいて、正確な人数はわかつていない。しかし、きちんと存在が確認されているのが“巫女”である。

一方、今では伝説と化し、いるかどうか定かではない“みこ”もいる。

神の子である“神子”がそうだ。この世界が出来てかなりの歳月が経っている今、神子はもうないとされている。

…しかしそれは、人間にだけのこと。人間でも、王位にあるもの達や天使、魔女、獣など…取り締まる者や人間の枠外にいるものは全て知っている。

“神子”は今の世もいることを。

*

日もとっくに空から消えた時刻。

真つ暗な部屋の中、窓からさす月の明かりが眠る姫様の顔をうつすらと照らす。微かな光がより彼女の存在を儂く見せた。

「…姫様、お目覚めになりましたか」

いつの間にか開かれていた目を見て、僕はそう声をかけた。
寝ぼけているのだろう。その瞳はまだ完全に開いていなければ、光が差しているようにも見えない。ポンヤリと天井を見ていた。
どれくらいの間、そうしていたのか。たぶん数秒、数十秒くらいだと思う。姫様は幾度か瞬きをして、やっと僕を見た。

「悠詩…？」

「どうなされましたか？」

「…お腹空いた」

起きて最初の言葉がそれですか。シリアルスぶち壊しですね。しかも、お姫様が軽々しく言つような言葉でもないですよ。自重してください。

なんて言えるはずもなく

「朝まで待てませんか？」

「待てない」

一応訊いてみたら即効で返ってきました。

「… そうですか」

軽く呆れた返事をしてから、そいついえば夕飯を食べていないといふことを思い出す。

おやつも食べないはずだし、最後に食事を取つたのは毎時だ。毎日三食おやつ付を姫様はきつちり食べている。しかも完食。そりやあ、お腹も空くはずだ。

「軽食でも……」

持つてきましょうか? と言おうとしたふと思つ。

… 厨はやつているだらうか。

只今の時刻は真夜中に位置します。見回り兵以外はとっくに皆寝ている時間です。叩き起こしてもいいけど、後からグチグチと文句を言われるのは面白くない。

さて、どうしようか。

言いかけたまま暫く悩んでいると、姫様が唐突に口を開いた。

「悠詩が作ればいい」

… はい?

「ばつ僕が姫様の食事をですかっ! ?」

「一体いきなり何を言つて出すのですかっ? 一瞬、空耳でも聞こえたのかと思いましたよ!」

「… 声が大きい。もう夜でしょ? 迷惑になる」

若干眉を顰めて姫様が言つ。珍しく常識的な言葉にて、「」もつともです」としか言えない。

… まあ、部屋は防音になつていて、実際に周りに音が漏れているかどうかといったら、ほんとありえないことに等しいのだが……。気にしちゃダメだと思う。なにより、姫様の言葉自体は正しいしけれど、僕が料理を作るかどうかといつのはまた別の話だ。

「いや、姫様…?」

「なに?」

「僕がここを離れるのはちよつと……」

「なぜ？」

「姫様を一人にするわけにはいけません」

「なんで？」

「危ないからです」

「どうして？」

「……」

「なんでしょう。この押し問答みたいな。いつまで経っても終わりが見えないのですが……。」

「悠詩？」

返事をしない僕に対して、不思議そうな顔をしながら首を傾げて僕を見る姫様。その顔とその仕草とその田舎は反則です。

「……わかりました。作ってきます」

結局、僕の方が折れた。

それ以外にどうしようと、もちろん、姫様を放つておくという選択肢は無しですよ。いつまでも続く「この会話を終わらせるこむ」と、僕が折れることが一番早いと思います。

扉を肩で押さえながら部屋に入った。

「お待たせしました、姫様」

台車で押してくるわけにもいかず、右手に皿を左手にポツトとカツプといった格好になつてゐる。行儀が悪いけど氣にしてられません。…なんのイジメなのか、お盆が無かつたのですよ。

一方、行儀など氣にしない姫様は、僕の行動に文句をつけない代わりに、皿を輝かせて右手を……正確には皿を見ている。

お皿の上に鎮座するのは野菜やハムをパンで挟んだもの。軽食に丁度いいだろ?と思つたのと、作るのが比較的楽なのでこれにした。それを食い入るように姫様は見る。

……キラキラした眩しい皿で見つめて下さるのは嬉しいのですが、それが食べ物に対してといふのは姫様として些か問題です。

「紅茶を淹れますから、少しお待ちくださいね」

「いただきます」

テーブルに皿を置いた途端に小さな手が伸びてきて、上に乗つたパンを掴んだ。そしてあつといつ間に咀嚼して飲み込む。紅茶を淹れるヒマすらくれませんでした。

「…かなりお腹が空いていたようですね…」

もう、呆れ通り越して凄いとしか思ひませんよ。なんですか、その早さ。いつもそんなに俊敏ではないじゃないですか!

なんて心の中で叫んでるとほおぐびも顔には出さないようじ、とりあえず紅茶を淹れる。

食事と共にと思っていたその紅茶は食後の一服のようになつてしまつた。…まあ、いいんですけどね。どうせ食後にももう一度淹れる予定でしたし……いいんですよ。うん。いいんです。

「おいしい」

紅茶をすすりながらそう言つ姫様の顔はなんとも可愛らしきもの

だつた。普段の無表情が嘘のように、嬉しそうに笑っていた。そんな顔を見せられたら、文句も説教も何も言えませんよ。

「姫様は、本当に美味しそうに食べてくださいますね」

行動で態度でその時の姫様の気持ちがわかる。顔だけを見ていたら、きっとわかる人はそうそういないだらう。それくらい、彼女の表情はえしい。

けれど食事をするだけは、その顔が和らぐ。見ている者まで心温まるような笑みがこぼれるのだ。

「悠詩の料理はおいしいから」

姫様は事も無げにそう言つた。

“僕の料理”はおいしい。作った僕としてはこれ以上無いくらいに嬉しい言葉。

けれど

「そんな言葉、余所で言わないでくださいね。厨の者達が泣きますよ」

それは僕が作った料理以外は美味しくないと言つているのと同類である。専門職の方達より素人の料理の方が美味しいなんて言われた日には……、彼らの反応が面倒くさそうなので考えたくもありません。

「わかった」

素直に頷く姫様。

聞き分けがいいって素晴らしいですね。さつきもそうだったら嬉しかつたのですけど。無理、でしょ。諦めが肝心ですよね、うん。それでもやつぱりジト目で姫様を見てしまします。仕方がないで片してください。

ジト目で見られている姫様は、空になつたカップを置いた後もぼんやりとした様子で窓の外を眺めていた。

「眠らないのですか？」

「……うん」

僕の問いか姫様は小さく頷く。

子供っぽい彼女は食事をとった後、必ずと言つていいほどすぐ眠りについてしまう。子供というか、行動的には赤ちゃんの方が近いと思う方もいるかもしませんけど気にしないでください。というか、気にしちゃいけません。

「少し話が逸れました。とりあえずそんな姫様が珍しく起きているのです。それも眠たそうな素振りも見せないで。

「怖い夢でも見たのですか？」

その問いに、数拍の沈黙があつたものの「うん」とう返事が返ってきた。

「ひとりになる夢を見たの

「ひとり、ですか」

「クンと弱々しく頷く姫様はその後もお話してくれた。

「気付いたら、誰もいなくなってるの。どこを探しても見つからない。ひとりぼっちで……巫女たちが泣いているのが見えるの。わたしが手を伸ばしても彼女たちには届かなくて、ひとりでそれを見るしかなかつた」

夢の中のお話に思い当たる節があつて、危つて反応するといふだつた。

なんとか悟られないう平穏を装い、姫様に優しく呟つ。

「僕はお傍にいますよ。決して貴女の傍から離れたりしません」

何も映していない虚ろな目を覗き込みながら、軽く微笑む。彼女が安心してくれるようだ。

すると、だんだんと光を戻してきた目が僕に向けられる。そして縋るような目をして口を開いた。

「絶対？」

「それが、僕の“誓い”ですから

決して彼女の目から逸らさずじっかりと見つめる。

信じてくれたのだろうか。まだ少し不安そうな顔をじつつも、「わかった」と呟いた。その言葉に僕は安堵する。

「今日はもう寝ましよう? そうしないと、また明日の朝食をどうなうことになつてしまふかもせんよ」

「コクリと頷いた姫様は寝台に向かう。布団に横になつたのを見て、僕は掛け布団を掛ける。首もとまで布団に埋もれさせると、姫様は片手を僕に差し出して言った。

「手、握ってくれる?」

珍しく訊ねる口調のその言葉。

心細い気持ちが不安そうな声に混じつていて、それを察した僕は特に文句も言わずに差し出された手を握つた。

小さくて細い華奢な手。壊れ物を扱うように優しく握り締める。安心したのだろう姫様は、軽く微笑んでから目を閉じた。

彼女の部屋は城の奥深く。人の目を盗むようにある場所。そこに隠された姫君は、皆が欲しがる神の愛娘。伝説であったはずの“神子”はこの世に、王族として産み落とされた。

だから一生、籠の鳥。

“神子”として産まれたばかりに、彼女は姫として外を出る」とは許されない。

「…成悠」

呟いて、僕は小さな手を両手で包み込む。そして祈るよつに額をついた。

穏やかで優しい日々を彼女に。

叶わないとわかっている願いを、それでも僕は願うしかなかった。

5・2・神子と巫女と姫様（後書き）

もし、見てくださっている方がいらしたら……のつもりで書かせていただきます。

ずいぶん遅い気がしますが、はじめましてです。

突然ですが、登場人物紹介 なんでものを後書き部分を使って書いていこうかな？なんて思っています。作者の気まぐれかと言われたら否定できません。代わりに開き直っちゃいます。

内容としては……そのまんまでですが、主要人物やただの登場人物など、様々な人物の紹介をしていくつもりです。
とりあえず、次回から一人ずつ紹介させていただきます。
まずは成悠からですかね？たぶん。

なんだか長い後書きですみません。

読んでくださった方、くださっている方々に感謝です。ありがとうございます。

未熟者が書いた未熟な作品ですが、この先も読んでいただけたら幸いです。よろしくお願ひします。

6・1・朝食の場

「神子が狙われている」

聞きたくない。

「だから、いざれは彼女に手伝つてもらつことになると思つ」

黙れ。

「成悠は大切だ。けど……」

それ以上言つな。

「俺達は、“成悠”より“神子”である彼女の存在の方が大きくて、必要としているといふことを否定できない」

僕の姫様は、成悠は、彼女は

人間の道具じゃない。

「……！」

怒りの感情と共に意識が浮上した。

さきつまで見ていた映像と目の前の景色が違うことに直ぐに気が付き、強ばつていた身体の力を抜いた。

眠っている姫様の手は僕の手に収まっている。どうやら、あのまま寝てしまつたらしい。

「情けないです。僕も」

苦笑しながら自嘲気味に呟く。

いくら夢見が良くなかったとはいえ、夢と現が一瞬混じった錯覚をおこすなんて恥以外のなにものでもない。せめて声を上げていなくて良かったと胸をなで下ろす。

「…ゆた」

ベットの枕元を見ると、いつもすら目を開けた姫様が僕を見ていた。

「おはようございます、姫様。起こしてしまいましたか？」

「悠詩のせいじゃない。自分で起きた」

言つて姫様は体を起こそうとする。それを僕は触れるように手をかけて押し留めた。

「いきなり起き上がりては倒れてしまいます。どうか、完全に目が覚めるまでお待ちください」

普段、低血圧な姫様は起きるのに時間がかかる。いかにも、まだ目が覚めきつていません。ところ今の状態で起き上がりたりしたら大変だ。倒れる可能性が無いと言い切れない。

少し苦い表情をした姫様はそれでも素直に「クリと頷いてくれた。本当は起き上がりたいのだろうが、前に無理してぶつ倒れたことがあるため自重してくれたようだ。

それに苦笑しながら、言い聞かせる。

「氣をつけてくださいね。お怪我をされたら困りますから」

「悠詩

名前を呼ぶと同時に、急に差し出された手は僕の袖を掴んだ。そのことに少し胸が鳴ったのは否定できない。

「朝食、久炉と食べたい。出来れば都夜も」

悪気はないのでしょうか。わかっています。わかっていますとも。

…わざわざの胸の高鳴りを返してほしい。
そう思つのは許していただきたいです。

「…………姫様」

「なに?」

「出来れば、考え方直していただきたいのですが……」

「イヤ」

ですよね。なんとか抵抗しようと思つたのですが駄目でした。
せつかぐの姫様と一人きりの時間に、他の方の介入は勘弁して欲
しかつたんですけどねー。特に都夜とか都夜とか都夜とか都夜様と
か魔女とか……。姫様に抱きついたら今度こそ殺しひゲフンゲフ
ン。引き離したくなつたりするんです。

けど

「ダメ?」

とか、ただでさえ愛しい姫様に可愛らしくなり田で見つめられたら反
論出来なくなりますよ。

無視したら当分お話ししていくださらなくなりそうですね……。

「駄目ではあります。一応、久炉様には声をかけておきますね」
結局承諾するしかなかつた。だつて、自分の独占欲のせいで一人
を呼ばないとか馬鹿みたいですからね。

「よろしく」

そう言つて僕を送り出す姫様。その顔が少し嬉しそうだつたから、
良いことにしましよう。うん。

重い足取りを少しでも軽くする要素を見いだしながら、部屋を出
るのだった。

*

「……あのさ、悠詩」

「なんでしょうか？久炉様」

「降りてくんない？」

「顔が若干青くなっている久炉様にニッコリと笑つて見せた。

「嫌です」

「……」

それつきり久炉様は黙り込んでしまわれた。

姫様に言われた通り、僕は久炉様を呼びに彼がこの城で寝泊まりする部屋へと来ていた。ドアを開けて寝台を見てみると悠長に寝ていたので、優しく起こして差し上げたのだ。

「……無防備に寝ている俺の腹を強打した抜け句、そのまま乗つかつたままのが優しい起こし方なのか……？」

「内臓破壊されて血を吐きたかっですか？」

「こつ恐いから。そして、早く退いてくれっ！さすがに立つたまま乗られたらキツいんだよっつ！」

半泣きで怒鳴る久炉様。

まったく、だらしないです。こんなことで声を荒げるなんて。これ以上騒がれても困るので、仕方がなく降りることにした。もちろん、しっかりと踏んであげながら。「ぐふおつ」なんて潰れた声は聞こえましたが、気のせいです、きっと。

「……なんで、朝からこんな仕打ちを……」

起き上がりつてお腹をさする久炉様を尻目に、堂々と僕は言い放つ。

「面白くないからです」

「やっぱ、昨日の話のせいか？」

間髪入れず返ってきた言葉は少し後悔が滲んでいたように感じた。義務として久炉はあるの話を隠すこともなくしたわけだが、実際のこと彼自身もネックになるくらいには気についていたのだろう。

そういう奴だつてくらい、わかってる。

だから、昨日の面白く無い話に対しては彼に怒つていない。あれは仕方がないとしか言いようがないことだ。

むしろ感情を制御しきれなかつた自分の方に非はある。

「違いますよ。気にしてません。貴方は、王子として人間を束ねる者としてあの話をしなくてはいけなかつた。それは、仕方がないことなんですね」

「なら、なんで？」

「なんでこんなことをしたのかを訊きたいのだ」。不思議そうな久炉を見て僕は軽く鼻を鳴らした。

「そんなの、理由は一つしかないに決まつてゐる。

「姫様が、貴方を部屋に呼んで一緒に食事を取りたいそうです。それが面白くないんですよ。なんで、わざわざ邪魔なヤツを呼ばなくてはいけないんですか」

「ハツ当たりつ！？」

「だつたらなんです。貴方さえいなければ……」

「ちょっと待つた！目が恐いから。かなり恐いからあ……！」

「うるさいですね。こんな王子様で、よく国がまとまつてゐるものですね。」

「とりあえず、姫様がお待ちですので、せつせと準備して貰ださい」
冷たい視線を投げかけておく。本当はいびり足りない……おつと間違いました。教育的指導をもう少しさせていただきたかつたのですが、今はこれくらいでいいでしよう。姫様をいつまでも部屋に一人きりにできませんしね。

「……なんか、俺の扱い酷くない？」

誰かの咳き声が聞こえた気がしたのですが氣のせいですね。

「なにか言いました？」

「にっこりと笑いながら訊ねると、何故か久炉様はひきつった顔で「何も言つてませんっ！」と首を小刻みに振つていてのですがどうしたのでしょうか。それに敬語になつてましたよ？」

少しばかり気になりましたが突つ込まないことにしちゃいます。

だから、早く着替えてくださいね？姫様が待つていてますから。

6・1・朝食の場（後書き）

読んでくださいり、ありがとうございます。

予告通り登場人物の紹介をさせていただきます。

（登場人物）

成悠（ナユ）

「歳は十五歳。性別はもちろん女。はじまりの世界の中心となる国のお姫様。実は一番田の姫で、姉と弟が一人ずついる。

神子であることにより、城の奥深くの田立たない場所に自分の部屋と庭を持つ。銀髪と灰色の目が神子の証。

小柄な体躯と仕草のせいでどうしても年相応に見えない。背が低く、凹凸のないスレンダーな体なのは自覚しており、結構気にしている。好きなもの：食べ物。庭の散歩。寝ること。嫌いなもの：我慢すること】

こつ、こんな感じでどうでしょう？

もし気になることがありました場合は答える範囲で答えます。お気づきの点などありましたら、教えていただけると助かります。さて、次の人物紹介は悠詩です。

しょーもない後書きですが、付き合つていただけたら幸いです。

6・2・朝食の場

思つたよりも早く準備を終わらせた久炉様と共に、姫様の部屋に向かう。

「ただいま戻りました、姫様」

「あら、姫様を置いてどこに行つていたのでしょうか」

ドアを開けた瞬間、嫌な声が聞こえ、嫌な姿が目に入った。「げつ……」と言わなかつた僕を褒めて欲しい。

この部屋の主である姫様の横で艶やかに微笑む女性。黒色の長く美しい髪と綺麗な顔をもつ魔女こと、都夜がそこにいた。

「おかえり、悠詩」

そう言つて僕を見てくださる姫様。

今日も可愛いです。とても可愛いです。抱き締めたくなるくらい可愛いです。……けど、貴女の横にいる黒い魔女は排除させてください。

そんな思いをおぐびにも出さず、にこやかに挨拶する。

「数日ぶりですね。なぜ、都夜様がここにいらっしゃるのでしおうか？」

訳・何で僕がいない間に、お前が姫様と一人つきりで居やがるんだ。

「姫様が私を呼んだ気がしましたの。そして来てみれば、たまたま悠詩さんがいなくて」

訳・姫様が呼んでいたのを私が聞き逃すとでも思つていますの？もちろん、アナタが居なくなつたのを見計らつて来たに決まつてますわ。

二人ははにっこり笑つて一連の会話をした。見た目的には普通の会話をしているようにも見えなくもない。実際、姫様はそういうところは鈍感なため、ありのままの状態だと思っている。

だが、久炉は僕達が犬猿の仲だということをよく知つてゐるため、会話に隠された黒い言葉達も少なからず聞こえていたのだろう。

「…ホント、恐えな。笑顔つて」

「どうしました？久炉様」

「なにか、言いましたか？久炉さん」

ポツリと呟いた声に、僕と都夜が反応する。恐いと言つてくださいました笑顔を一人同時に久炉に向けた。もちろん聞こえてたし、確信犯だ。

徐々に青くなつていくその顔が見ていて楽しいですね。

「い…いや…。アハハ」

引きつり氣味の笑顔でその場をしのごうとする久炉。そんなんで僕達が納得するはず無いじゃないですか。あはは。

「久炉様？」

「久炉さん？」

顔を近付けて名前を呼ぶ。いつの間にか都夜も側まで来ており、僕同様に顔を久炉に近づけた。

都夜の顔を至近距離で見た久炉は顔を青以外の色で染め上げたが、また直ぐに色が戻りまた変わると……忙しそうだった。

そして最終的には

バタツ

ぶつ倒れてしまわれた。

「だつ大丈夫ですか？？久炉様つ？」

自身せいであるにも関わらず、急に態度を一変して倒れた彼に寄る都夜。その顔には珍しく慌て心配した色が見えていた。

あーあ、情けないお姿ですねー。

「大丈夫ですかー？早く起きてくださいねー、久炉様」

声をかけながら抱き起こして体を揺らす。横で「もつと丁寧に扱いなさいっ！」とか言っている、倒れさせた張本人はうるさいので無視しておく。

どーでもよそそうな態度をとる僕と、過剰なほどに心配している都夜を見て、珍しく呆れた調子で姫様が言つた。

「なんだか、久炉が可哀想」

いつもと違う彼女に、どうしましたっ？なんて訊けるヒマはなかった。

*

みんなでテーブルを囲んで食事をする。姫様から時計回りに都夜、久炉、僕の順番だ。

一応、僕は身分が下なので、後で一人で食べようかと思っていたら半ば無理やり座らされた。

「悠詩も一緒にごはん食べる」

服の袖を掴んで僕に言う姫様。：なんだか有無を言わせない何かがあつた。顔はいつも通り無表情だったのになんででしょう？

久炉様はとすると、あれから程なくして目を覚ました。起きて直ぐに都夜の顔が間近にあつたため、またしても気を失いそうになりましたが何とか大丈夫だつたみたいでした。ちなみに、そんな様子を見て都夜は「ふふっ」と笑つっていました。確信犯ですよね？たぶん。

目の前に座る都夜を見てみる。姿は綺麗だが、中身がどうも僕は好きじゃない。一人きりで居たら、絶対にいがみ合つていそうだ。

お互いチクチクと嫌みを言つてするのが容易く想像できる。

不意に都夜と目が合つた。顔一面に渋面を作つて直ぐに視線を逸らす。

おかげで僕は頬を引きつらせないようにするのが大変だった。

「…本当、なんで久炉は都夜なんかを…」

そう思つた瞬間、久炉が噴き出した。何してるんですか。食事中に汚いですよ。

蔑んだ目で彼を見ていると、顔を真つ赤にした久炉が僕に突っかかる。

「お前なつ！いきなり何言つてんだよつ…！」

「…は？」

何言つてんでしょう、この人。僕は何も…

「本当、なんで久炉は都夜なんかを…。つて悠詩言つた」

姫様が食事をしながら視線を寄せざすに言った。

あー。言つてましたか。口に出しちゃいましたか。

結構無意識に言葉にしていたらしい。これで、久炉が真つ赤になつてゐるも納得だ。

「いいじやないですか。ウソ言つてませんし」

さらりと言つと、「な……」と口をパクパクしている。間抜けに見えますよ？

「それとも、違いました？本当は久炉様は都夜様のこと大嫌いだったとか……」

「違うつ…！」

僕の言葉に、久炉は怒った顔をして叫んだ。

「俺は都夜のこと嫌いなんかじやないつ…むしろ…」

「むしろ？」

僕が訊ねたことにより、自分を取り戻してしまったのだろう。「むしろ…」の続きをなかなか返つてこない。次の言葉を発するのを

待つていると、別の声が介入した。

「お止めなさい、悠詩」

我関せずだつた都夜が、すつと顔を上げる。その顔は動搖など欠片も見られず、ただ冷静だつた。

「貴方は仮にも従者の位なのですよ？他国とはいえ、久炉さんは王族です。無礼にあたりますわ」

怒つているわけでもない。淡々と、僕に注意をする。

それに薄ら笑いしながらも、久炉に体を向けて深く頭を下げる。

「そうですね。すみませんでした、久炉様。僕の非をお詫びします」

「あ…いや、俺も悪かつた。頭を上げてくれ、悠詩」

「わかりました」

久炉の許しがあつて、頭を上げたことにより彼の顔が自然と目にに入る。

さつきまで真っ赤に染まっていたはずの顔は、今ではすっかり元の顔色に戻っていた。

けれど、苦笑したその目は少し寂しそうだった。

当たり前だろうな。

そう思つ。

僕の言葉で過剰な反応を見せたのは久炉だけ。都夜はいたつて普通。少なからず想いを寄せられていることを知つても彼女は表情一つ変えず、事務的に久炉を助けただけ。

それは、どんなに応える仕打ちだろうか。

想う久炉は、落ち込む様子はない。苦笑してそれで終わり。

想われてる都夜は、否定も肯定もしない。今みたいに淡々としていて、決して応えることはない。

それが、とてももどかしく思えた。

この場に一人を呼んだ姫様は、あれつきり言葉を発しない。代わりに、うつすらとした笑みを口元にのせていた。

6・2・朝食の場（後書き）

予告通り、今回は世話係さんの紹介です。どうぞです。

（登場人物）

悠詩（ユタ）

「年齢は十五歳。性別は男。

立場は成悠の世話係兼護衛。幼い頃から世話係として成悠の傍にいる。護衛としての腕前も相当のものだつたり。

性格は少し？腹黒い。姫様最優先な思考を持つ、ちょっと危ない人。他人がどうなると関係なく、面白くない場合はどんな冷酷非情なことも成し遂げる。全ては成悠次第。

身長は平均並。久炉より少し小さい。そこまで背が低いわけでもないため、あまり気にしていない。むしろ小回りが利くので満足している。

好きなもの：成悠。単純な人。

嫌いなもの：都夜。自分と成悠の間を邪魔する者。」

どうだつたでしょう？今回の人物紹介は。

次回は都夜ですかね。

次も見ていただけたら嬉しいです。

7・1・姫様と侍女。

「成悠様、ただいまですー」

久炉達の一件から、暫く日が経つたある日のこと。
庭に出て散歩をしていた姫様の前に、一人の少女が現れた。…否、
空から降りてきた。

「おかえり、優里」

特に驚きもせず、相手を迎える姫様。…前にも言いましたが、少
しは警戒して欲しいものです。

なんて考えて、一瞬でも気を逸らした自分が腹立たしい。

「えへへ～。やつぱり、成悠様をぎゅーっとすると落ち着きます」

いつの間にか少女は姫様に抱きついていた。とても幸せそうな顔
でぎゅーをする。

常の通り、特に嫌がりもしないで姫様は体を委ねる。その姿は顔
立ちや色合いを気にしなければ、歳の近い仲良し姉妹にしか見えな
い。

なんだか、前にも似たことがあつた気がします。

「姫様を離してくださいませんかね、天使様？」

険のある目を幾分和らげ、ニッコリ笑つて言つ。引きつり気味の
頬はこの際、気にしてはいけません。誰であろうと僕の姫様に抱き
つかれるのは嫌なんですよ。

たとえ、神から使われし“天使”としても。

「あ～、悠詩くん。ただいまです。…もう、天使様なんて呼ばない
でくださいって、いつも言つてるじゃないですかー」

「どこをどう見ても、今の貴女の姿は天使様じゃないですか
にへらと笑つた後にプクツと頬を膨らませる少女に、呆れ口調で
返した。普段ならば気にせず名前で呼ぶが、今の彼女の姿を見ると

それは躊躇われる。

少女の背には翼が生えていた。純白の羽根で出来た、淡い光を纏う美しい翼。目の前で、僕の姫様に抱きつく少女は天使以外の何者でもない。

「天使… ですけど、優里は優里です。優しい里でスグリですよ？」子供の駄々のように、自分の名前を繰り返す天使様。それに対し、ため息を漏らしながら言つ。

「なら、その羽根を仕舞つてください。仕舞つたら、あなたを名前で呼びますよ」

「えつ？… 羽根？」

不思議そうな顔で呟いてから、自分の背中を見る。どうやら氣付いてなかつたらしく、「あつ」とか小さい声を上げてからその翼を仕舞つた。瞬き一つ分くらいの速さでそれは消える。いつ見ても、その仕組みはわからない。

「あはつ。ありがとうございます。危つて出しつぱなしになるといでしたあ。危なかつたですね~」

全然危なそうに聞こえない声音で優里が言つ。脳天氣なんだかなんなんだか……。

「もう少し気を付けてください、優里」

「心配してくれてるのでしょつか？ありがとうございます」

注意をしたはずだというのに、優里は反省の色は見せず柔らかく微笑む。

僕には出来ないような、無邪気な笑み。ときめきよりも、安らぎを与えてくれるような不思議な笑みを彼女はつくる。何も知らない者が見ても、天使は慈悲深く、優しいものだとすぐに決めつけてしまいそうなものだ。

「今日は、どれくらいの時間が経つてます？」

久しぶりに見た微笑みを観察していると、不意に優里が訊いてきた。その目から少し不安の色が感じられる。

珍しく、彼女の腕の中に収まっている姫様が答えた。淡々とした声も気にせず、優里は「「つ〜ん」と悩み始める。

「思つたより長かつたですねえ。侍女長様からお叱りを受けるでしょうか？」

「大丈夫。わたしが口添えしておく」

苦い顔になつた優里に、姫様が安心させるかのように言う。

「アツチとコツチでは、時間の流れ方が違う。わからなくなるのは当たり前。だから、気にすることない。適当に理由つけて、わたしの用事にしておけばいい」

珍しく饒舌だと思っていたら、なに言つちやつてるんですか姫様っ！絶対、その理由とやらを考えて、侍女長に伝えに行くのは僕の仕事にする気でしょ！

僕の心の中の抗議はむなしく、誰にも届かなかつた。代わりに、ほつとした様子で優里が微笑む。

「よかったです。よろしくお願ひしますね、悠詩くん

…やつぱり僕の役目ですか、ソレ。

そう嫌な顔をしていると、姫様は僕を見て当たり前だと言つように頷く。今に限つてタイミングが良すぎですよー。狙つてやってます？

問い合わせたくなる衝動を抑え、僕は再びため息を吐いてから、それまで閉じていた口を開く。

「わかりました。けれど、姫様と優里も一緒に考えてくださいよ？」

：一介の侍女が一ヶ月も職場放棄した理由を

二人は口には出さなかつたが、その言葉を聞いた時の感情はかなり顔に出ていた。

「面倒くさい、と。

ニツコリと久炉様曰わく恐い笑顔を見せてやつて、そんな気持ちを粉々に碎いてやる。

僕にだけ面倒事を押しつけよつなんて、そんなこと許しませんよ？

そこから、優里と僕とともに姫様で「侍女の職場放棄の理由」を考えるたのだった。

7・1・姫様と侍女（後書き）

見てくださった方、見てくださっている方、ありがとうございます。
…毎回毎回、同じような言葉ですみません。

とりあえず、人物紹介です。

（登場人物）

都夜（ツヤ）

「年齢不詳。性別は女。艶やかな黒髪と紫黒色の瞳が特徴。魔法という不可思議な力を持つ、世界に1人しかいない魔女。その力のせいで大抵の人間から恐れられている。

成悠を溺愛しており、悠詩と同様に少し?変な人。悠詩のことは軽く「消えればいいのに」とか思っている。久炉のことは……ネタバレになるので省略。基本、人間への接し方は平等。

身長は女性にしては高めで、悠詩と同じくらい。身体つきは一言で言えばグラマー。成悠と正反対で、細い所はきちんと細く、出てほしい所はきちんと出でる。むしろ、豊満すぎ。好きなもの：成悠。可愛いもの：悠詩。

〔詩〕

一部ネタバレのため省略です。だつたら、書くなよーとか思われそうですが、書きたかったのです。深い意味はありません。

この頃、毎日更新することが出来ていないです。なんだか、申し訳ありません。

出来るだけ早めに更新するので、これからも読んでいただけたら幸いです。

ちなみに、次の人物紹介は久炉です。

7・2・姫様と侍女。

天使といつて言葉を聞いて、まず何を思い浮かべるでしょうか？
純白な羽根。慈悲深き。優しい微笑み。神に仕える者……といつたところですかね。

実際、僕達の世界にいる天使もそんな感じです。

世界が出来た時からいふと言われている天使は、可愛らしい少女の姿をしているといふ。生成色の細く柔らかい髪は、ゆつたりとした波を描きながら腰元まで流れしており、大きくぱっちらとした瞳は薄い緑色をしているらしい。

そんな、神に近いものとされ、崇拜されそつた天使様は

現在、人間に紛れて神子様の侍女として働いています。

*

「いやー、助かりましたあ。これでお咎めなく、お仕事に戻ることができます」

へらつと笑う少女は、平凡的な茶色の髪をしている。しかし、長めの前髪から時折覗く瞳の色が彼女が何者かを示すのに十分だった。「けど、よく考えつきましたねー。あんなに遠回しに眞実に近いことを」

さつきまで嬉しそうに笑っていた優里が不意に感心しているような顔をした。それに僕は苦笑して言つ。

「嘘で固めると、いざれ綻びが生まれますからね。適当に似たことを言つておけばいいんです。最終的に姫様からのお許しがあつたとさえ言えれば、殆どの者は反論できませんし」

姫様付きの侍女がひと月も職場を放棄した理由を、多少無理があるだろうことは承知で伝えた。

彼女の親族の中で病で倒れたもののがおり、看病出来るのが彼女しかいなかつたため故郷へと帰つていた。主である姫様には許しをいただいていたが、急だつたために侍女長に伝えるのが遅くなつてしまつた。

と、まあ、だいぶ無理がある言い訳を、優里と共に彼女の上官である侍女長に伝えてきた帰り道が今である。

ポーカーフェイスな侍女長は訝しそうな顔もせず「ああ、そう」と一言いつて話を受け入れてくれた。納得してくれたかどうかは別として、表面上は承知したことにしてくれたのだ。話のわかる人で助かる。

「まあ、染めた髪の色を元に戻して、本当のことを伝えたらあの方はどうな表情をするのでしょうかね」

目立ち過ぎる生成色の髪は今は茶色に染めている。さすがに目の色まで変えられないが、長めの前髪と侍女装飾である薄いヴェールで顔を隠しているため、独特的の瞳の色を見られることはほとんどない。

自分で言いながら想像して、つい笑つてしまつた。あの顔が呆けるのか、ただ驚くのか、怯えるのか。優里が素性を露わにするときは是非とも同席したい。あり得ないですけどね。

「笑い」とじやないですよう。バレたら一貫の終わりです

表情を曇らせ、頬を膨らませる優里。その姿は人が思い描くような天使の姿には見えない。

「すみません。…と、その顔やめてくださいね。姫様のお部屋に着いてしまいましたから」

姫様が万が一真似したら困つてしまします。可愛すぎて卒倒しそうです。

そんな想像をしているなどといったことは微塵も見せずに、一つの扉の前で立ち止まってから優里に注意する。彼女は少しふてくされた顔をしてから、表情を引っ込めた。

そして

「成悠様っ。ただいま戻りましたあ！」

勢い良くドアを開け、イスに座っている姫様に向かつて走り出す。気付いた時には遅かった。すでに優里は姫様を抱き締め、頬擦りしている。

「…優里、少し苦しい」

珍しく抗議する姫様に、彼女は慌てて腕の力を緩めた。

「すっすみませんっ！大丈夫ですかっ？」

そうやって訊ねる間も姫様を離そうとはしない。

…いや、一旦離しましょ。その思いは口から漏れてしまつ。
「離れましょ。優里？」

だんだんイライラしてきたので、一ヶ口り笑つて言つてやつた。さつさと僕の姫様から離れる……なんて口が悪いことは思つてませんよ？たぶん。

僕の笑顔を見て、一瞬ビクッと体を跳ね上げさせたか優里は、泣々姫様から離れた。素直なのはいいことです。

一方、やっと解放された姫様は僕を見ていつもの一言を言つてへださつた。

「おかえり、悠詩」

その言葉が嬉しくて、自然と頬を綻ばせる。

「ただいま帰りました、姫様」

彼女のたつた一言が僕に幸せというものを運んでくれる。僕に対して言ってくれるその言葉が何より大切で……、その機会を奪う者

はいいくら優里でも許しません。

お預け状態をくらつていい優里は潤んだ瞳で姫様を見た。

「ぎゅってしちゃ、ダメですか？」

その様子は、主人の顔を伺うみづなみづにかの動物を連想させるのは気のせいでしょうか。

そんな僕の思いなど露ほども知らない姫様は、そんな優里を真っ直ぐ見て言つた。

「いい。けど、強いと苦しい」

「ありがとうございます」

許しをもらつた優里は、今度は包み込むように優しく姫様を抱きしめる。

その行為にイラつきながらも、いつもと違つて何度も姫様を抱き締めたがる優里に疑問を覚える。どうしたのだろうか？

そう思つたのは姫様も同じだつたらしく、不思議そうな声で訊ねる。

「なにか、あつたの？」

それに優里は、ふるふると首を左右に振つて答えた。

「違いますよー。…ただ、成悠様が恋しくなつただけです」

嘘とも本当ともとれないその言葉は、僕の不安を煽る」としかしなかつた。

7・2・姫様と侍女（後書き）

読んでくださいり、ありがとうございます。では、恒例？の人物紹介をどうぞです！

（登場人物）

久炉（クロ）

「年齢は十八歳。性別は男。焦げ茶色の髪に赤墨色の瞳を持つ。悠詩達が住む国の隣国の王子。文武両道。決断力、行動力もあり、物事を冷静に判断する頭も持っているらしい。まだ王位に着いていないが、国民からの人望も厚い。

成悠の婚約者となっているが、形ばかりの名ばかり。お互いその気は無い。悠詩は悪友であり、大切な友人と思っている。都夜のことは成悠や悠詩と違った意味で好き。だけど、相手にされない可哀相なヤツ。

身長は平均より上。いわゆる長身。程よく筋肉が付いていて、見た目的にも悪くない。顔も良いため、女性に人気がある。

好きなもの：体を動かすこと。

苦手なもの：悠詩の笑顔

うう…。人物紹介がだんだんショボくなっているような気がしなくもないです。

けど、設定つて大切ですね。ときどきズレたりしそうですけど……。そうならないように気をつけようとは思つてます。

さてさて、次回の人物紹介は優里です。

次も、お付き合いいただけたら嬉しいです。

8. 世話係と姫女。（前書き）

今回、成悠（姫様）は登場しません。
念のため、報告です。

では、本編をどうぞ。

姫様の侍女が帰ってきた。

神とやらに“報告”していった天使は、ひと円経つて帰ってきてしました。

「もぅ。なんだ、そんな目で私を見るんですかあ

頬をブクッと膨らませて僕を見る優里。睨んでるつもりなんですよけど、全くそう見えません。

「…そんな目とまどんな目でしょ…」

「私が帰つてくるのが遅かつたからって、拗ねないでくださいよ~」

「拗ねてませんっ！」

「どうせって見たらそんな風に思つのですかっ！？ 叫びたくなるのを抑えて、否定だけしておべ。

そんな僕とは正反対に優里はクスクスクと笑つて言つた。

「相変わらずですねえ。まあ、実際のところは私が帰つてきて、成悠様と二人きりになれなくなるのが面白くないんでしょうけどその通りですとも。

わかつているなら、変なことを言わないでください。それと、拗ねているわけではありません。

心の中で愚痴つてると、優里が人差し指を立てて僕の胸を押した。女性が男性にむやみに触れるものではありませんよ、と言おうとしたとき、先に彼女の方が口を開いた。

「ちやんと口に出して言つてくださいねー。どうせ、思つてこる」とは駄々漏れなんですから

子供みたいな無邪気な笑みでそつまづ。声音も優しい。なのに、

その言葉と全く似つかわしくないのはわかつていてやつているのだろうか。

たぶん、わかつてないな。

けど、そう言つてくれるなら好都合です。さつさと用件を済ませて姫様の元に戻りたいですから。

「では、言わせていただきます」

「どうぞー」

緊張感のない間延びした言い方も聞き慣れた。初めてあつた時はかなり苛ついたつけ、なんて思い出しながら言つ。

「僕になんの用ですか？」

この問いは当たり前だ。

別に僕が彼女に用事があつたわけではない。彼女に呼ばれて、わざわざ姫様が眠りについたのを見計らい、部屋を抜けてきたのだ。

「悠詩くんは知っていますか？」

唐突に優里が訊いてくる。もちろん「なにを？」としか言ひようがない。実際、そう答えた。

すると、急に真剣な顔つきになつて彼女は言つた。

「巫女狩りのことです」

ついこの間、聞いたばかりの言葉。僕にとつて不快でしかなかつた話すことだらう。

「その顔を見る限り、もう知つてこるようですね」

ため息をついた優里に、声は出さずに頷く。知つてている。知りたくなかったけれど、知つてしまつた。

神子が……成悠が狙われていることを。

「情報源は久炉様でしうねえ。の方方がアナタに言わないはずがない。…そして、どこまで知つています？」

「この頃、また巫女狩りがされて行方不明者や死者が数名出ていること。あと、目的が前回と違うらしいということです」

「その目的は……」

「知っています」

優里の声を遮って答えた。目的とやらを口に出したくはない。違う感情まで吐き出しそうで、嫌だつた。

それがわかつたのだろう。優里はそれ以上訊くことはしなかつた。代わりに、沈黙が流れる。

しばらく続いたそれを僕が破つた。

「貴女は、いつから知つておられたのですか……？」

彼女がこの世界を離れたのはひと月前。僕が久炉から話を聞いたのは彼女が“ここ”にいないときだ。

すると、ふふっと優里は笑つた。

「私をなめていただいたら困りますねえ。仮にもこの世界の監視者ですよ」

そう。彼女は天使であり監視者だ。天使の役目が、神様自ら創つた世界を監視すること。そして数ヶ月に一回くらいの割合で“報告”をしにいく。

なら、と疑問が浮かんだ。

「何故、僕に教えてくれなかつたのですか」

今知つているということは、僕が知るよりもずっと前に彼女はこのことを知つていたはずだ。

「私の口から人間に何かを教えることはタブーです。それに、悠詩くんに言つて恐い目に遭うのは嫌ですからねえ」

最初は教本でも読むように言つていたはずなのに、最後の方は本当に嫌そうに顔をしかめた。

心外です。まったく、みんなして僕をなんだと思つているんですかね。

「…言い分はわかりました」

反論したいことはたくさんありますが、やめておきます。軽くム

力つきますが面倒なので。

それより

「貴女は何を考えているのですか?」

教えてはいけないのなら、何故僕にその話について訊いたのか。万が一、知らなかつたらどうする気だつたのだろう。

僕が口に出さなかつた分も、優里は“聞いていた”はずだ。彼女にも、姫様と同じく聞く能力を持つてゐるから。

「そうですねえ…。そのことがあり、成悠様を少し外に連れ出したいなあ…。なんて」

：！？

突拍子もないことを彼女は言つてくれましたよ？一瞬思考が飛びくらい驚きました。しかし驚きの次に抱くのは、当たり前ですが賛成とは全く反対の気持ちです。

「駄目です」

絶対嫌です。あの可愛らしく、愛らしい僕の姫様を人目がある場所に連れて行くなんて、絶対に絶対に嫌です。

駄目と即答で断言した僕に、優里がむくれて突っかかる。

「なんですかあ！…そもそも口では“駄目”なのに、心では“嫌”になつてますよつ？」

「だからなんですか。僕は断じて反対です」

嫌ですよ。当たり前じゃないですか。もし、姫様に集るような輩がいたら殺したくなりますもん。想像しただけで危ないのに、実際そうなつたらどう責任取つてくれるんですかつ！

「…自分を抑えるとか、相手を殺さないという気持ちが無いのですか？」

「僕がそんなこと出来ると思うですか？」

「……」

呆れ口調の優里に間髪入れずに訊いてやつたら、黙り込まれてしま

まつた。その沈黙がなによりも「出来ないだろ?」とこうことを語ってくれている。

……自分で言つておきながら、少しばかり悲しいです。

「けつけど、これは決定事項です。そろそろ成悠様に城外のことを知つていただかなければいけませんし」

あ。やっぱり僕の言葉は否定してくれないんですね。

「それに、次の巫女を探しに行かなくては。そこで成悠様が必要になるのです。代わりの巫女を見つけられるのは、神子様だけですから」

僕が聞きたくないことを、優里は口に出した。大嫌いな言葉を声にして言つた。そして、拒否権が無いことも。だから吹つ切ることにした。

「…わかりました」

「わかりたくないけど、そつまつしかない。どうせ、僕の一存で決めるものでもない。」

「優里と都夜も一緒なのでしょう?」

「はい」

「いつ頃からですか?」

「出来るだけ早い方が…」

「では、準備が出来次第ですね」

「よろしくお願ひします」

その後も事務的な話をし、終わつてからはそれぞれの寝室に戻ることとなつた。

当人であるはずの姫様に伝えるのは明日だろ?。

気分が滅入つたまま姫様の元へ戻るのは気が引けたため、適当な部屋に入つて頭の中を整理していた。

正しくは、頭というより心だ。

高ぶる感情を抑え込まなくては、無意識になにかしでかしてもお

かしくない。前にいろいろやらかしたので、その辺は経験済みだ。
だから、そうならないようにしなくては。

姫様に心配させたくないから。傷付けたくないから。

そのために、この高ぶりを押さえたい。なのに、優里の声が言葉
が反芻する。

聞きたくないのに、思い出したくないのに。

神子様。

その言葉が嫌い。

なんで、あの人は神子なんだ？

普通の姫として、穏やかに過ごして欲しかった。

なのに神子として生まれたせいで、自分のために思つように動け
ない。動き方すら知らない、真っ白な少女。

神子という名が自由を奪い、彼女自身を縛る枷。
僕は“成悠”さえ幸せになってくれればいい。

だから

神子なんて消えればいいのに。

8・世話係と侍女。（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございます！感謝です！

前話から2日くらい空いてしました……。

出来るだけ日を空けないようにするので、これからも見ていただけたら嬉しい限りです。

では、人物紹介に移りたいと思います。

（登場人物）

優里（スグリ）

「年齢不詳。性別は一応、女。生成色の髪に薄い白緑の瞳が特徴。神の使いであるはずの天使だが、訳あって侍女として成悠のそばにいる。城内では髪は茶色に染めているため、天使だとはバレていな。性格は天使の名で思い浮かぶように、平等に優しく慈悲深い。その上、無邪気な面もある。

成悠とは主従関係にあるが、姉妹みたいな接し方をする。悠詩は仕事仲間であり友人。都夜は昔からの付き合いがあり、心を許せる友みたいな存在。久炉は他国の王子としか認識がない。

身長も体の凹凸も並だが、バランスは取れてる。見た目は童顔？で、十六か十七歳位にしか見えない……その実は、結構な年齢だつたり。好きなもの：空。成悠。自然。生き物。

嫌いなもの：秘密

今回もわけわからんないのが一つありましたね。

嫌いなもの、秘密。

バカか？なんて思われそうですが、気にしないでください。きっと
いつか本編に出ますから。：保証はありません。

そして、今のところ登場した人の分の紹介は終わりました。
まだまだ沢山の人物が出てくる予定なので、その度に後書きに載せ
させていただきます。

それまで　登場人物紹介　はお休みになります。
また載せていただくときは、よろしくお願ひします。

9・初めてのお出かけ

「そと？」

聞き慣れない言葉を姫様は不思議そうに呟いた。急に話を持ちかけられて、何のことだろかと首を傾げている。

そんな彼女の反応を何となく予想していたのだろう。優里は気にせず、にこやかに答えた。

「はい。行ってみませんか？お城の外へ」

気軽に、散歩にでもいきませんか？という感じの口調。確かに普通の感覚だと、外へ出掛けんくらいどうってことないだろう。

しかし、姫様は立派すぎるほどの箱入り娘。産まれて十五年間、一度も城の外に出たことがない。城内でも自室や庭など限られた場所しか歩いたことのないようなお方だ。

それなのに、急に外へ出てみないかと言われたところで意味が飲み込めないのも無理はない。理解しても、困惑したり悩んだりすることだろう。

だから、直ぐに返事なんか返つてきたりしない。

そう高を括つてたのに

「いきたい」

すぐに答えられてしまつた。

「本当ですか！？」

姫様の言葉にはしゃぐ優里。心なしか、姫様の顔も嬉しそうに微笑んでいるように見える。

なのに、僕は一緒に喜べなかつた。

外出の理由。それがネットで、どうしても喜べないし嬉しがることも出来ない。

知らない姫様は珍しく頬が緩んでいる。とても嬉しそうなのは目

に見えてわかつた。姫様が笑うことは……普段、表情を変えない彼女が笑うのは僕にとつても嬉しい。

嬉しいことなのに、なんだか少し痛かつた。

「どうしたの？ 悠詩

思考にはまつていて、それまで気付かなかつた。

いつの間にか近くまで来ていた姫様が、僕の顔を覗き込んで言葉をかけてくださつた。その顔はさつきと違つて不安そうで、……そうさせたのが自分だと思うとやるせない。

けど、そんなことを表情に出すほど僕も馬鹿じやありません。余計に心配させたくないですからね。

だから

「なんでもないですよ」

いつも通り笑つておく。彼女を安心させれるように優しく笑う。

「……」

それでも不思議そうに見る姫様。仕方ないですよ……。

だから、気分を変えるように僕は話しかけた。

「城の外に出るのは楽しみですか？」

僕の質問に、迷いなくコクンと頷く姫様。その姿がとても可愛い。

「……不安だったり、怖かったりはしませんか？」

少し躊躇つたが、一番気掛かりだったことを訊ねてみる。初めて、外に出るのだ。何も知らない場所に行くのは少し心細く感じる時もある。

すると、姫様は少し悩んでから答えた。

「こわい

「ならつ……！」

やめましょ。行かないことにしましょ。

そう言おうとしたのに、続けられなかつた。

「けど」

僕の言つより早く、姫様が口を開く。なにを言つのか見当もつかなかつた。それだけに、その言葉はかなりの破壊力だった。

「悠詩も、一緒でしょ？」

「…え？」

一瞬何を言われたのかわからなくて、放心してしまつた。そんな僕に、姫様はかまわず続ける。

「悠詩も一緒なら、こわくない。それより、いろんなモノを見てみたい。知らないモノを知りたい。そしたら、こわいものも無くなると思う」

そう言つて、目を細める姫様。その微笑みは子供のよつで、見ている者を引きつける力が合つた。しばらく見とれていたが、さつきの言葉を思い出し、その意味を理解してハツとする。

悠詩も、一緒でしょ？

当たり前のよつにそう言つてのける姫様がとても愛しかつた。一緒にいれば、こわくないと言つてくれて嬉しかつた。おもいつきり、抱きしめたくなるくらいに。

だから、今度は心から笑つて僕が言つ。

「もちろんです。僕はずつと姫様のお傍にいますよ。貴女の役に立てるよつ」と。

ああ、僕は馬鹿ですね。

いらない心配などせずに、変な気持ちに囚われずに、彼女を護ることだけを気にしていればよかつたのに。

無闇に利用されるようだつたら、僕が阻止すればいいんです。ど

んなことをしても。

それまでは外のいろいろなことに触れて、感じて、考えて……今まで出来なかつたことを存分にさせてもらいましょう。姫様に、今よりももっと表情を覚えていたぐのに一度いい機会ですしね。

そんなことを思いながら、田の前で僕を見る愛しい人に微笑んだ。

「あのー。私いるんですけど?」

いつのに間にやら蚊帳の外になつてしまつていた優里が、空気を読まずに声をかけてきたので、冷たい田を向けさせていただきました。当たり前ですね?

少し怯んだ顔をしてから、優里は気を取り直して言つ。「でつでは!決まりですね?明日から出発なので、そのおつもりでお願ひしますですっ!」

早口で言つた後、速攻で部屋を出て行きました。

…はて?僕にかしましたかね。

*

そんなことがあつたのが、昨日のこと。

今の僕達は出掛けの準備をして姫様のお部屋に集まつていた。「では、移動致しますので心の準備を。動かないでくださいね」都夜がそう言ってそれぞれの顔を見る。

当初の予定の通り、姫様の同行者は僕と優里と都夜だった。都夜が移動魔法を使って目的地に行く。

「行きますよ」

都夜がそう言ったのと同時に、淡い光が僕達を包み込んだ。その中、誰かの手が僕の手に触れる。子供のような小さい手で、誰なのかは直ぐにわかった。

だから、大丈夫ですよ。

と気持ちを込めてその手を握る。

さあ、最初の目的地はどこでじょいっ。

10・1・火の巫女と少女。

火を司る巫女は髪も瞳も赤に近い色合いを持つという。そして、その色を表すように、気が強く、情熱的で、熱血的な人が多いと聞く。

あまりにも僕が苦手な要素たっぷりなので……会ったことはないけれど……正直、会つてみたいとも思わなかつた。

だといつのに

「一番目は火の巫女様のところですよー！」

なぜ、初っ端からそこなんですかっ！？
最悪だ……。その思いから、かなりのしかめつ面になつてしまつて
いたようだ。

「悠詩くん、どーしたんですか？顔が悪いですよ？」

さつき元気よく目的地を告げた優里は心配そうに僕の顔を覗く。
なんですか？顔が悪いって……。顔色が悪いならわかりますよ？顔
つて人相ですか。元からですよ、この顔。少々いじけたくなりまし
た。

「ほつときなさい、優里さん。コレの顔が悪いのはいつものことです」

都夜の素つ氣ない物言いに一瞬聞き流しそうになつたが、よくよ
く考えると余計に酷くないですか？自覚しても気になりますよ。
しかも、コレって……。なんでしょうか、このイラつきは……。し
かも優里、額かないでください。

必死に怒りを抑えていると、いつの間にか姫様まで僕の方を見
いた。興味本位なのか、観察物を見ているような目で僕をじっと見
つめている。

そして、ポツリとこぼされた。

「かわいい顔だと思う」

悪びれていたわけでもなく、眞面目な顔で言つてくださつた。その言葉がどんな破壊力を持つのかも知らずに。

「あーあ。成悠様？それは男の人にとって褒め言葉ではないんですね。…悠詩くーん。ショックなのはわかりますが、固まつてないで」

優里の苦笑しながらの声で我に返る。

一瞬意識が飛んでしまつていたようだ。しかし、意識が戻ると直ぐに不快な声が聞こえた。

「…ふひ。可愛い、ですか。確かに、しかめていなければ、少女のような顔にも見えなくはないですものね」

今にも笑い出しそうな震えた声で都夜が言つ。口元は手で隠しているが、その下にある口が絶対に歪んでいると断言できる。

「さつきは“悪い顔”で、今度は“少女”ですか。ケンカ売つてます？」

頬を引き呪らせながら都夜を見るとフンッと鼻を鳴らされた。

「事実を言つたまでですわ」

そんな当たり前みたいに言わいでくださいよ。怒りを抑える僕の身にもなつてください。

：姫様がいなかつたら殺すのに。

少しばかり物騒なことを考へていると、聞き慣れない声が聞こえた。

た。

「あ、あの。何をなさつてているのですか？」

見ると一人の少女がオドオドとした様子で立つていて。

考へてみれば、人の家の前で堂々と話をしていたのだ。不信人

物と勘違いされても仕方がない。

「すみません。騒がしかつたですよね。今から訪ねようと思つてい

たところだつたんですね

「ウチをです、か？」

優里の言葉を聞いて、不思議そつに元氣うつ少女。警戒心なんてものは微塵も感じなかつた。

向ける。

私たちは天火の巫女様は会いに来ましたの
貴女 ですね？」

少女は一瞬驚き浮かされたよ^{ハハ}はほーとしたが、
早くは自分を耳
り戻すと頓狂な声を出した。

「わざわざ巫女ってなんてわかつたんですかー!?」
顔と声と態度を見る限り、本当に驚いていた。むしろ
なぜか不思議な感じだった。巫女は二の黒ミミ上まく行か

に駆られたが、止めといた。なんか、いろいろ気の毒過ぎて。

僕が言うと、

僕が詰つと、自分の髪を一房とつてまじまじと見ていた。少女を見て真っ先に目に付く、ワインレッドのような赤い髪を。しばらくそれやって、やつと呑点がいった顔に変わる。

「ああ、そうか。そうですよね。巫女は珍しい髪色をしているんですね。…普段、あんまりみないから気付かなかつた

うんうん、と何度も首を振つてから、僕達の方を見てハツとした顔になつた。…もしかして、僕達の存在を忘れていたんですか。

「スッスミマセン。わたしに何のご用でした?」

「自然な質問を少女はする。答えたのはまた優里だった。」
「実は、少しの間「」に泊めていただきたく来たんです。」都合つきます?」

かる。 少女を見ると、目が点になっていた。 とても驚いていることがわ

「…いや、泊めるのは良いのですが、ここが何処かわかつていての
お言葉ですか？」

口を開いたかと思えば、かなり困惑した様子で僕達の対応をした。
彼女がそんな顔をする理由はよくわかる。普通、ありえないのだ。
巫女が住む屋敷に泊めてもらおうなんて。

巫女は神に近く、人々からは崇拝されるような存在である。そんな神にも似た人の家に泊めていただこうなど、大抵の人だと恐縮する。罰当たりなどと思って、巫女の住む屋敷に居座ろうなど思わない。思うとすれば、無知な者か、無鉄砲な馬鹿くらいだ。

だから少女の対応の仕方は普通のものだ。むしろ、良い方と言える。少し誤解を招くような言い方ではあつたが、悪意は全く感じられない。つまり、泊まること自体は別に構わないのだろう。

それがわかっているのか、優里は表情を崩さずに答えた。

「はい、知っていますよ。お泊まりになりたいと言われて困惑している理由も察しがつきます。…実は、込み入ったお話がありまして。外では避けたいんです。中に入れていただければ嬉しいのですが…」

…

苦笑した優里の顔を見て、少女は慌てた様子で言つ。

「そつそつですよね。立ち話も何ですし、中へどうぞ。大したおもてなしは出来ませんけど」

そう微笑む姿は、僕が想像していた火の巫女とかけ離れていた。おつとりした、優しそうな人にしか見えない。しかも、全く警戒心が無いことも驚きだ。

うちの姫様といい、この方といい、“みこ”の名を持つ人は人を疑う事はしないのでしょうか？それとも、どこか抜けているとか…隣で共に歩く愛しい少女と、火の巫女であるはずの少女を見比べ、そんな失礼なことを考えながら、促されるがままに最初の巫女の屋敷へと入つたのだった。

客間のような所に案内され、敷かれた座布団に腰を下ろした。目の前では巫女らしい少女が慣れた手つきで人数分のお茶を淹れていく。その様子に若干違和感を感じたが、何も言わないでおいた。

「それにしても、お客様なんて久しぶりです。ゆっくりしていつてくださいね？」

少女は柔軟な笑みを浮かべながら、僕たちの前に湯呑みを置いていく。

「うやうやしくの家は和風な造りをしていいるらしく、イスがない。床…正しく言えば畳の上…に座つたことのない姫様は少し落ち着かないようだった。さつきから何度も足を動かしている。

姫様には悪いけど、そんな所もちょっと可愛い。

「そういえば、自己紹介がまだでしたよね」

全てのお茶を淹れ終わり、自分の場所に座つた少女はお茶を一口飲んだ後、そんなことを言つた。

「わたしは眞さん（）」察しの通り、天の火に属す巫女です。名は…

…

そこで言葉は途切れ、少女は急に黙り込んだ。と思つたら、赤面しながら咳きのよくなき声で言つ。

「…ヒメ、と申しま…す」

「ヒメさん、ですか」

「ヒメさんねえ。それまた大胆なお名前ですわね」

恥ずかしさからか俯く少女に構わず、優里と都夜はその名前を連呼する。2人の顔を見るに、わざとやつているのがわかる。だつて、楽しそうに笑つていますもん。

悪趣味だなあなんて思いながらその様子を静観する。…止めないのかつて？そんな無粋なことはしませんよ、面倒ですし。

「…ヒメつていつも、お姫様の“姫”じゃないです。緋色の緋に

明るいと書きます…」

涙目になりながらの少女の説明に、ニヤニヤした笑いを浮かべていた2人は「なるほど」と納得した顔をした。

「それで“緋明”ですかー。音だけきいていると誤解されそうなお名前ですねえ」

言いながら、うんうんと頷く優里。絶対わざとだと思ひ。

「どうどうか、緋と呼んでください…。恥ずかしくて死にそうです…」

相変わらず真っ赤な顔で俯く少女。その様子に都夜はいつものようにふふっと妖艶に笑った。

「ヒイ、ですね？緋明の緋をとつた名ですわね

「…はい」

一応受け答えはするものの俯いたままの緋明さんに、

「顔をあげてくださいませ。可愛らしいお顔が見えませんよ」

都夜は普通ならば恥ずかしくて口に出来ないような台詞を平然と言った。赤みを増した顔を少女はおそるおそる上げる。…なんだか危ない雰囲気に見えるですが。

この場でそう思つたのは僕だけだつたらしく、優里は気にして振りを見せなかつた。ちなみに、姫様は未だ座り方に悪戦苦闘していました。

優里は少女が顔を上げたのを確認してから口を開いく。

「では、こちらも自己紹介をしなければですねえ。…けれどその前にお訊きしたいことがあるのですが、よろしいですか？」

「はい？」

不思議そうな顔をしながらも頷く緋明さんに、珍しく真面目な顔をして質問する。

「この国のーの姫様のことは何かご存知ですか？」

「えっ？」

脈絡がないように思える質問に、少女は目をパチクリさせてから答える。

「一の姫様がいらっしゃることは知っていますけど……一の姫様は幼い頃から病を患つておいで、公の場に出たことはありません。ですから、一の姫様がどういった方なのかまでは知りませんよ？」

「その姫様が実は“神子”だということも…？」

優里が相手を試しすように言つと、少しの間沈黙が落ちた。

「…どこからの情報ですか。それは」

聞こえた声は、少女のものとわからないほど冷たい。彼女が纏う雰囲気も、先の穏やかさなど感じられないくらい、張り詰めたようなものになっていた。

その変わりように少し驚いたが、優里は全く動じない。むしろ、楽しそうに笑つてみせた。

「知つていらっしゃるのですね」

「なんのことでしょう」

「しらばくれるおつもりですか？まあ、いいでしょ。……合格です」

「はい…？」

満足げに言つた優里に、いつそう訝しげな顔をする紺明さん。当たり前だ。急に「合格」なんて言葉を言つたのだから。しかし、その顔はすぐに驚愕へと変わった。

「…天使、様」

少女から、無意識にといった感じの言葉が漏れる。田は優里を見たまま見開かれていた。

「騙してすみません。けど、あれでは敵に一の姫様が“神子”だとバレてしましますよ。もう少し、隠し事を上手くできるようになりますよね」

につこりと笑う優里の髪は生成色。ついさっきまで平凡な茶色だったその髪は、いつの間にか本来の髪色に戻つていた。

「改めて、紹介いたしましょうか。私の名は優里と申します。見ての通り、天使ですー」

わざわざ言わなくても、その髪が嫌味なくらいに彼女の存在を示してくれている。

茫然としていた緋明さんは我に返ると、優里をしつかりと見据えた。

「なぜ、あなた様がここへ…？」

「それは追い追い話すとして、先にこちらの自己紹介してもいいですかね？それからの方が良いいと私は思いますし」

理由を訊ねられたがサラリと優里がかわす。緋明さんは困惑顔で頷いた。というか、巫女より神に近いとされる“天使”に言われて反論なんか出来るはずもない。

それを知つてか知らずか、優里はマイペースに話し続ける。

「まずはこの黒髪の女性は都夜さんですー。見てわかると思いますが、魔女さんですよ」

「よろしくお願ひしますわ、緋さん」

紹介されて、都夜は微笑みながら挨拶をする。言つのは些か癪だが、その笑みは色っぽい。大抵の人は男女問わず落ちそくながらい心惹かれそうなものだつた。もちろん、僕以外はですが。

しかし例外は他にもいるようだ

「へつ？まつ魔女さん！？世界に一人しかいないってあのつー！」

笑みに惹かれるどころか、緋明は都夜が魔女であるという事実に驚いていた。この場合は例外というか、仕方がないと思います。滅多にどころか一生に一度会えれば良い方の“魔女”という存在が目の前にいるのだから。

それでも、これまでの彼女のテンションを見ていて少し不安になる。都夜に対する反応は驚きと少しの怯えが交じっていた。優里に対してもほぼ同じ様な感情を抱いていたはずだ。姫様の正体を知つたらどうなるんでしょう？倒れなきやいですけど。

僕が珍しくそんな心配をしているというのに、優里はといふと氣

にせずに紹介を続ける。緋明さんの言葉にすら返す気が無いらしい。

「それじゃ次は、成悠様ですね。成悠様は“神子様”です」

「…みこさま？」

姫様を見て、緋明さんの動きが止まつた。

姫様の髪は外出ということがあつて、色を変えている。彼女の色も、彼女がどのような存在なのかを的確に表すものだつたからだ。止まつたまま動かない緋明さんを見て、その髪色のせいで信じていないとthoughtたのだろう。優里は姫様の髪色を戻しながら言う。

「そうですよー。神の子の“神子様”です。ほら…」

勘違いした優里のおかげで姫様の美しい銀色の髪が露わになる。それを見ても、しばらく緋明さんから返事は返つてこなかつた。それどころか

「緋さんつー？」

そのままぶつ倒れた。

優里が駆け寄るが、すぐには目を覚まさない。

どうしたんじよーか?なんて言う優里。自分のせいだという自覚は全くもつて無さそうです。天然なんですか?それともバカなんですか?殴りたい衝動に駆られるけど、姫様がいる前でそんなはしたないことはできない。

都夜は都夜で予想していたのだろう、笑つてゐる。…わかつてたらなら、止めるよ。僕も止めなかつたため人のことは言えせんが。こいつと同類つてのは気にくわないですけどね。…一応、倒れるきっかけとなつた姫様は、その様子を不思議そうに見ていた。…観察していた、の方が正しいでしょうか?人が倒れているのが珍しくて気になるんじょですが、やめてください。当事者の意識も無をそうです。

こんなメンバーで大丈夫なのでしょうか。先が思いやられます…

10・3・火の神子と少女（前書き）

今回は、悠詩以外の視点も話の最初と途中に含まれます。切り替えがわかりにくいかもしれませんが、ご了承ください。

「緋明」

誰かが呼んだ。
その名前はわたしのであつて、わたしのじゃない。
ねえ、わたしの名前じゃないの。
わたし達の名前であつて、わたしの名前じゃ、ない。
だから、呼ばないで……

「緋さんつ！」

「……」

ふつと意識が浮上する。目の前には、生成色の綺麗な髪を持つ天使様がいた。どこか心配そうな顔でわたしを見ている。

「……わたし、死んだんですか……？」

そう無意識に訊いてしまつていて。

だつて、目の前に天使様がいるんだもの。人離れしたその美貌を見られるなんて、きっとここは天国なんだ……。
ぼんやりとした頭でそんなことを思つていると、ブツという何か吹き出したような音が聞こえた。
なんだろう？

「あはははははっ！ なにバカなこと言つてんのよ。生きてるわよ。
このおバカ」

豪快な笑い声。

襖の方に顔を向けると、そこにはわたしがよく知る人がいた。高

い位置で括った髪が歩くにつれて揺れる。吊り気味の瞳は少しだけ気が強そうな印象を受ける、私と正反対な那人。

「…メイ、ちゃん？」

わたしの大切な人の名前を呼ぶと、相手は一瞬しまつたといつような顔をしたけどすぐに苦笑に変わる。

「ごめん、心配で出て来ちゃつた」

美人はどんな顔でも様になるなあ。なんて、覚めない頭で思った。

*

豪快に笑っていた少女はメイといふらしい。

「すみませんっ！紹介が遅れました。この方はわたしの姉のメイです。此度のご無礼、お許しください。お願ひしますっ」

膝を折って正座をし、手を畳につけ、深々と額を畳に擦りそなぐらい頭を下げる緋明さん。いわゆる土下座というものをしていた。初めて見ましたが、ちょっと引きますね…。

「気にならないでください。顔を上げてください、緋さん」

やんわりという優里の声でおずおずと顔を上げる。それでも相手を窺うように上目使いで見ていた。不安で不安で仕方がないつて顔だ。

「…緋、いい加減にしなさいな。仮にも火の巫女の“緋明”なのよ？せめて、前を向きなさい」

はあ、というため息と共にメイさんが言ひ。口調とは裏腹に心配そうな顔をして緋明さんを見ている姿は“お姉さん”って感じ。しかし、それを見ていない緋明さんは、顔を上げるビックリが田まで伏せてしまった。

…火の巫女のイメージとはかけ離れた姿ですね。むしろ、メイさんの方が話に聞いていた巫女のイメージそのままです。

暫く経つてもそのまま顔を上げない緋明さんに諦めたのか、メイさんは僕らの方に視線を移す。そして、正座をしたまま頭を下げた。

「お見苦しいところ見せてしまい、申し訳ありません」

緋明さんは違い、深すぎず浅すぎないお辞儀。凜とした姿は彼女の容姿とも合っていて、やはり火の巫女つて感じがする。

姉妹だから、火の血が少し入っているのでしょうか？

頭を下げた後、ゆっくり顔を上げたメイさんは僕達を見て優雅に微笑んだ。

「改めて、初めまして。メイと申します。以後、お見知りおきを…と言いたいところですが、忘れてくださった方が助かりますね」

「メイちゃんっ！」

メイさんの言葉に、さっきまでの態度とは一変して眉を吊り上げた緋明さんが叱責する。声は少し大きかったんですけど、全然恐くないです。

だからなのか、それとも慣れているのか、怒られてもメイさんの表情は少しも変わらなかつた。その様子に、僕は気付かれないと眉を顰める。メイさんの凜々しくも、上品な笑み。それに少しの違和感を覚えた。

確かに最後の一言のせいもあるかもしませんが、それだけじゃないです。

笑っているはずなのに、目が笑っていない。笑っていないどころか、感情が読み取れなかつた。事務的、機械的の表現が妙に合ひ。

「では、失礼致します」

その笑みを張り付けたまま、軽くお辞儀をする。

「メイちゃん待って…！」

スッと物音一つたてずに立ち上がると、妹の制止も聞かずそのままどこかへいつてしまつた。

*

「よろしかったのですか？」

メイちゃんが立ち去った後、置いてかれた私を気遣うように優里さんが声をかけてくれた。

心配させないように、わたしは精一杯の笑顔を作る。

「はい。いつものことですから」

そう。いつものこと。メイちゃんが人前を嫌うのは昔から。悪いのは彼女じゃない。人を避けて生きてこなきやいけなかつた。だから人前に出るのは苦手になつてしまつた。

わかつてゐる。わかつてゐるけど

…けど、たみしいよ。

「…すみません」

「どうして緋さんが謝るんですか？」

「メイちゃんが……姉があんな態度を取つてしまつるのは、わたしのせいだから」

今のはわたし、どんな顔してるかな。きっと情けない顔してるんだろつたなあ。こんななんじや、またメイちゃんに怒られちやう。

「わたしが火の巫女として、その証を持つて生まれてきちゃつたら」

この色さえ持つて生まれなければ、きっとメイちゃんもあんな風な扱いを受けなかつた。

「言葉が悪いけど、メイちゃんの存在が震んでしまつたのです」
証が無かつたら、きっと“普通”に生きれた。わたしだけじゃなくて、メイちゃんも。

あんなに優しい人を追いやつたのは、日陰者に育てたのは、巫女を大切に思う人々。

「だから、わたしが悪いんです」

幼い頃の、いいなりだったわたしを睨いたくなる。自分を通せな

かつたから、メイちゃんがこうなってしまった。

今のわたしが大切なのは、“みんな”じゃない。緋をみてくれる、メイちゃんだけ。巫女は“人々”を切り離せないけど、わたしは彼女以外の“人”はどうでもいい。

どうやつたら、あの人を幸せに出来るのかな。

*

よく内容が見えない話をした緋明さんは、少しして何か思い出したようにハツとした顔をした。

その理由は問わない。触れたら引き返せなくなるから。

「すません。お疲れですよね。今お部屋に案内します。今日はゆつくりとおやすみください」

我に返つたらしい少女は、苦笑しながらそう言ひ。

それから僕達はそれぞれ部屋へと通された。

「姫様? どうしました?」

月が空高く登る時刻。

いつかと同じく姫様はぼんやりと窓を眺めていた。ビルを見るでもなく、ただ外を見ていた。

「…あの2人…」

外を見たまま、視線を逸らす「…」となく姫様がぽつりと呟いた。静寂の中ではないと聞こえない小さな声で。

「緋明さんとメイさんですか?」

僕の問いかに、無言のままコクンと頷く。そして変わらない声量で囁くように言った。

「二人で一人」

唐突に言われる、よくわからない言葉。

二人で一人？ 一緒にやなくて、一人？

姫様は何を言いたいのでしょうか？

「どういう意味ですか？」

わからないから訊くしかない。けれど、その質問の答えは返つてこなかつた。

なんの反応もないため沈黙が訪れる。

そんな中、不意に姫様の頭がカクンと下に落ちた。顔を上げたかと思つたら、その後も上下にユラユラとさせる。まるで、眠りに落ちる子供のようですね。

微笑ましく思いながら姫様に近づいた。

布団に寝かせるために椅子に座る姫様を抱き上げる。心配になるくらいに軽い身体。壊れ物を扱うように優しく抱く。

僕に抱かれた姫様は笑みを浮かべるわけでもなく、人形のように無表情。起きている時と違い、そのお顔からは可愛らしさが消えて美しいものとなる。

「…もうすぐ、一人になる」

布団に寝かせるとき、姫様は確かにそう呟いた。

10・3・火の神子と少女（後書き）

見てくださった方、見ててくれている方、ありがとうございます。本当にありがとうございます！

前の話から大分日にちが経ってしまいました。楽しみにしてくださっていた方がいらしたら、すみませんでしたm(—)m
これからは一日から三日間に一話のベースで書く予定ですので、見捨てないでください（泣）

お知らせ。

前話の最後の方を少し変えました。読み返さなくても、話の流れは変わっていないので大丈夫だと思いますが、念のためお知らせです。

お城を出て、数日が経つ。

外の世界は姫様にとつて“初めて”がたくさんあり、それを知つていくことが楽しそうだった。普段変わることのないその顔が僅かに緩んでいるのを見つける度に、微笑ましくてつい僕の頬も緩んでしまう。

この機会は丁度良かつたかもしれませんね。

遠目から、緋明さんと一緒にいる姫様を見てそう思った。

理由はなんであれ、彼女がいろいろなモノを知ることができた機会だから。

「悠詩つ

僕に気付いた姫様が名前を呼ぶ。きっと、自分の所に来いと言つことだらう。もう少し言葉を付け加えてくれば、わかりやすくて助かるんですけどねえ。

そう思いながら苦笑したい気持ちを押さえ、若干早足で姫様の元に向かい、じうじましたと訊ねる。

「コレ…」

そう言つて差し出された小さな手の上に乗つてているのは、箸という名の一一本の棒。お城ではフォークやスプーンなどを使って食事をしてきたが、緋明さんのお屋敷ではこの箸を使う。

食事の中身もお城とは全く異なつていた。主食もパンではなくお米です。

「お箸がどうしたのですか？」

差し出されたものの、これを僕にじうじうといつてはしゃうか。

不思議に思つてみると、姫様は視線をテーブルへと移した。それ迫つてみるとそこにはお皿が一枚があり、片方の皿に小豆が十粒

程度が乗っている。

「さっきまで、成悠姫様がお箸の練習をしていましたのです。悠詩さんもどうですか？」

笑みを見せながら緋明さんが言つ。最初の頃より大分緊張は解けているらしく、その笑みは無理してのものではない、人柄に合つた穏やかで優しいもの。

それに反して、僕の顔は少し暗くなつてしまつ。

「…お箸の練習ですか」

正直、面倒くさくてやりたくない。使い慣れないお箸は、食べたものを上手く口まで運ぶことが出来なくてイライラする。ここに留まるのは一時。ずっと居るわけではないし、別にここにいる間だけ我慢すれば平氣だうつと思つていたため、練習しようつんて思つていなかつた。

適当に断つうか……

なんて思つたのに、出来なかつた。

「悠詩も、一緒に練習」

子どもみたいな片言言葉で姫様が言つ。大きな二つの双眸は僕を捉えている。その目には命令的なものが無い代わりに、もちろんやるよね？なんて言う期待が満ちていた。もう少し表情が現れるようになつたら、キラキラした目というのがぴつたりになるんでしょうね…。

軽く現実逃避をしてから返事をする。

「…わかりました」

純粹無垢でキラキラした目を見て断れますか？ 姫様相手に僕がそんなことするなんて絶対無理です。

内心、自分の弱さにため息をつきながら僕は練習に参加する事を決めた。

*

「上手になりましたね、お一人とも」

そう言った緋明さんは、まるで自分のことのよう嬉しそうだった。

「…お箸つて大変なんですね」

体力消耗したような沈んだ声を自分が発する。おかしいですね、活発に動いたわけではないというのに。

小一時間ほど、小豆を箸で掴んで皿に移すという地味に神経を使う作業をしていたため疲れた。何故だか眉をかなり寄せていたようで、眉間が結構痛い。

指で固まっている眉間を揉んでいると、クスクスといった笑い声が聞こえた。

「すみません、笑つてしまつて。けれどお箸つて普段使わない方々にとつて、とっても難しいものなんですね。勉強になりました」人を馬鹿にしたような笑いではないのがわかる。彼女はそんな風に人を笑うことはしないんでしょうね。

まだ数日しか共にいないけど、そう思つ。じゃないと、常識と言われるものすら知らない姫様のお相手なんてできないでしょうから。笑う緋明さんに悪意なんて全く無いのがわかつていいから、僕は苦笑しするしかない。

「では、そろそろ失礼します。姫様、行きますよ」

そう言って立ち上がる。けれどその前に、コテンと何かが僕の膝の上に落ちてきた。見ると、銀髪の頭が上手に乗つかっているではないか。

顔を近づけて見ると、スーと寝息が聞こえた。いつの間に寝てたんですか。

「…成悠姫様？」

「……」

突然倒れられた姫様を、緋明さんは不思議そうに見ながら名前を呼んだ。しかし返事は返つてこない。どうやら熟睡しているようです。

「どうしたの？」

返事がないことを不安に思つたのか、急にオロオロとしだす緋明さん。いいから落ち着いてください。ただ寝ているだけなんですから。

わけもなく手をせわしなく動かす緋明さんに、僕は軽くため息を吐いてから言った。

「大丈夫ですよ。寝つているだけですか？」

「寝てる？」

動かしている手をピタリと止めて、田を点こしながら、確認するようになにか尋ねて緋明さんが言葉を発する。

姫様のこの状態を見て、寝ていると言わずに何と言つのうか。

「きっと普段使わない神経を使つたせいで疲れたのでしょうか。遊び疲れた子供が、すぐに寝つく様子みたいだとでも思つてください」説明してみると、「ああ……」と言いながら頷く緋明さん。「……わかってくれるのは嬉しいんですけど、『子供が……』等で納得されるのは少し微妙な気持ちです。

まあ、何はともあれ緋明さんは落ち着いてくださいましたし、どうしましょうかね？」

抱き上げて部屋まで運んでもいいが、生憎と姫様が枕にしているのは僕の足。立ち上がるために、その頭を床に下ろさないといけないのはわかっているのですが、少し勿体無い気もするのです。

うーん。と悩んでいると、緋明さんが提案してきた。

「あの……ここで少し寝かせてあげては駄目ですか？ 起こしてしまつのは可哀想です」

僕の膝から姫様の頭を下ろす拍子に、起きないとも言い切れない。

「う、安心した顔でぐつすつと黙つてこるの」起立にしてしまつのは
忍びない。

「うですね、急ぐわけではありませんし…」

「うですね。では、もう暫くここで寝かさせていただきます」
姫様が起きのを危惧してです。もちろん、僕の下心が全てでは
ないですとも…」

言い訳じみたことを思つながら、緋明さんの提案に賛成の意を伝
える。

すると、こいつと笑つて

「では、お茶入れてきますね」

と言つて一旦部屋から出て行つた。

都夜のように傲慢でもないですし、優里のよつこ一癖あるわけでも
なくして、良い女性ですねえ。

緋明さんの後ろ姿を見ながら、しみじみと黙つた。

11-2・緋明の名と一人の姉妹。

「…悠詩さんって、成悠姫様にとつて心を許せる大切な人なんですね」

眠っている姫様を見て、緋明さんがそう言った。唐突に何を言い出すのでしよう、この人は。

「何故、そう思うのですか？」

問うてみると、柔らかく笑つて答えてくれる。

「とつても無防備ですから。人前で眠るつて、結構警戒するものなんですよ？」

「無防備。姫様は誰に対しても警戒しませんが？ 現に今、僕だけが部屋にいるわけじゃないのに眠つていますよ？」

なんて思つていたのが顔に出でていたのでしょうか。緋明さんはううんと唸りながら言葉を続けた。

「その顔を見ると、わたしが思つているのと意味合いが少し違うそうですねえ…」

「どういう意味ですか？」

「わからない僕は、ただ首を捻るしかない。」

「人つて“ひとり”だと不安定になつたりしますよね。人数を表す

“一人”の場合でも、孤独を表す“独り”でも」

「言つていることはなんとなくわかりますが、先程の話と何の関係が？」

彼女が何を言いたいのか、わからない。けれども緋明さんはそれに答えずに話を続ける。

「部屋に一人でいると心細くなることがあります。それは孤独が強くなるからです。そんな時、誰かが傍に居てくれると心が休まります。けれど、その場合は“誰”がということはあまり重要ではありません。優しくしてくれる“誰か”でいいのです。……しかし、大勢に囲まれていて“独り”を感じた場合は違います。敵か味方がわ

からないその場所にいるのは苦痛にしかなりません」

そう言つた緋明さんの顔が若干苦々しいものになつたのを、僕は見逃さなかつた。

けれど気付かないフリをする。今はまだ、それについて触れるべきじゃない。

「大勢の人がいるとき“独り”を感じた場合、“誰か”じゃダメなんです。優しくされたつて、疑り深い心がそれを信じられない。けれど本当に心を許せる人が傍にいてくれたら、それだけで強張りを解くことができます。“この人がいるから大丈夫”そう思うから、ずっと警戒しないで済むんです。姫様もきっと、悠詩さんのことをそう思つているんじゃないのかなつて、わたしは思うんです」

オドオドしていて頼りないようなイメージだったのに、自分の意見を言つていた時の彼女はとても凛々しく見えた。まるで、噂に聞いていた火の巫女のようだ。

「どうやら、しっかりと自分をお持ちの方のようですね。あなたを見ぐびつていました」

てつくり、意見すら人に言えないような弱々しい人だと思つていた。だが、さつきの様子を見る限りでは、自分が本当に伝えたいことになると周りを気にせずに話すことが出来るようだ。

自分が思つたことを主張する、といつも熱弁する。噂に違わず、熱血っぽい所があるようですね。

今までの思い違いに僕が苦笑していると、キヨトンとした顔をした緋明さんが、数拍置いてボンッと湯気が出そうなくらい急激に赤くなつた。

「あわわわわわっ！すみませんっ。なんか出しゃばつたことを……

慌てふためく少女には、先程の凛々しさなど欠片も見えない。どちらが素なのでしょうかね。両方でしうか。それとも、全てが嘘なのでしょうか。

11-2・緋明の名と一人の姉妹（後書き）

読んでください、ありがとうございます。アクセス数を見て、少しニヤケる今日この頃です。

かなり短い回となつてしましました。まるでオマケのような、中途半端なお話に。

代わりに、次は少し長くなるかも？です。

あれつきり、下を向いて黙り込んでしまった緋明さん。たまに姉様を見る時は優しそうだが、僕の方は一切見ない。

静かなのは助かりますが、この空気は微妙に重いです。暇ですし、気になつたことでも教えてもらいましょうか？

「…緋明さん」

「ははははいっ！？ なんでしょうか？」

呼ばれた少女は頓狂な声を上げて返事をする。…名前を呼んだぐらいで、そんなに驚かなくてもいいではありませんか。

「落ち着いてください。まあ、相手は男だし、緊張するのはわかります」

と言つてはみるけれど、さつきまで普通に話してたじやないですか！つていうのが本音です。なんでいきなり緊張しているんですかね？

「あつ、いえ。悠詩さんといても緊張したりしないですよ？お顔が女の子みたいで可愛いから、男の人つて感じしないですし」

緊張してないなら良かったです。その後に続いた言葉は気になりますけどね。

僕の頬がちよつとばかし引き吊つてる感じがするのだが、彼女は気付いていないようだ。

「けど、本当にお綺麗な容姿をお持ちですよね。男の子で美少女な見た目の人つて初めて見ましたよっ！初めて会つた時なんか、絶対女の子だと思つてましたもん」

興奮しているらしく、若干頬を上気させて言つ緋明さん。その顔は先程と打つて変わって明るいものになつていて。彼女に憧れていものがいたら、気絶しそうな程の可愛らしい満面な笑み。

そんな無邪気な笑みを見て僕は思つ。

ああ…、彼女が巫女じやなればよかつたのに。巫女じやなけれ
ば…

殴れたのに。

心の底からそう思つた。そりやあ、思いたくもなりますとも。
…だつて、可愛いと言われて喜ぶ男がどこにいますか？…
いや、世界中探しぱいるかもしませんけど…。けれど、僕は断じ
てそんな趣味は無いです！有りたくもねー…ですよ。しかも！です。
なぜ僕の顔を見ると、それも男だと知ると目を輝かせる女が…いや、
女性が多いんですか！挙げ句の果てに着せかえ人形にされるし。そ
れも女物。…ざけんな。オレは男だつ…！

…おつと、失礼いたしました。

言葉使いが汚い上に、一人称が…。きっと幻聴であり幻覚です。
誰も聞いてないからいいんですよ。いじけるどころか、危うくキヤ
ラ崩壊するところでしたが気になません。

このままでは、素がバレosoなので本題に戻ることにします。
わざとらしく、「ホホン」と咳払いをしてから僕は口を開いた。

「その話は置いといて、緋明さんに教えていただきたいことがある
のです」

まだ興奮状態が抜けきれてないのか、僕が話しかけても怯えずに、
むしろ笑顔で「なんですか？」と普通に返事をしてくれる。
僕としてはかなり微妙な感じです…。まあ、どうせその笑顔もす
ぐに崩れるでしょうけどね。

「この家と緋明さん達についてです」

单刀直入に言つた。遠回しに言つのは面倒くさくて嫌いなので。
けれど、わけがわからない。とでもいつような顔で緋明さんは僕
を見る。

騙されませんよ？

そんな思いを込めて、僕は薄く笑った。

きっと彼女のその顔は“フリ”だろう。何を聞かれるかくらいはわかつているはずだ。というか、わからないほどの馬鹿だつたら切り捨てますよ、即刻に。

「メイさん、でしたつけ。あなたのお姉さんは今どこに？」

「…家にいるはずです。一緒に住んでいますから」

僕の質問に若干目を伏せながら緋明さんは答える。

「そのわりには、最初会った時以来、見かけていないんですよ」

「…この屋敷は広いですから。たまたま会わないのでしょうか」

「けれど、姿すら見ていないんですよ？」

「いくら広いからといって、何日も何日も相手を見かけることすらしないなんてことあるんですかね。意識していないならともかく、きちんと探しているというのに。」

それに、おかしいことは他にもあった。

「あと屋敷についてですが、侍女らしき者を一人も見ていないんですね。巫女のお屋敷なのに、です」

巫女というのは王族並に偉い立場、高い位がある。巫女が女である以上、男を置くことはそうそうないが、身の回りの世話のために侍女ぐらいはいるものだ。なのに、この屋敷でそれらしき人物を見たことがなかつた。

それどころか、僕達以外に人の気配が無い。

世間一般風に言うなら、不気味だ。

僕の言葉を、緋明さんは目を伏せたまま聞いていた。その姿を見て、何人の人が彼女に同情するだろうか。端から見たら、絶対に僕が悪役なんでしょうね。

人事のように思いながら、僕は言つ。

「話を聞かせてくださいますよね？」

訊ねる形は取つたが、拒否権を与える気はない。だからその言葉は本当に形だけのもの。当たり前ですよ。大切な“情報”を、僕が

逃すはずないではありませんか。

きつと拒否権が無いことを悟ったのだ。悲しそうに緋明さんが「ふふふ」と笑ったあと、ポツリと零した。

「ほつといては、くれないんですね」

消え入るような小さな声で彼女は呟く。訊いているわけでもない言葉に、それでも僕は答えた。

「“情報”は多くて困ることはありますからね」

僕にとつて、彼女に話を聞くのは情報を得るために手段にすぎない。多数の情報を集めて、自分なりの真実を見つけるためのものだ。彼女はそのための材料。

話すことで相手が傷つこうが、どうなるうが関係ないし、気にしない。

いつまでも目を伏せたままの緋明さん。さすがに我慢の限界が近づいてるんで、さつさと話していただけませんかね。僕は意外と短気なので、いつキレるかわかりませんよ？

自分を抑えるのも面倒くさいなと思っていると、少ししてまた笑い声が聞こえた。今度はどこかおかしそうに笑っている。

「率直に言つんですね。他に言い方があつたでしょ？」
「騙されたかったのですか？」

「いいえ」

答えて、緋明さんは顔を上げた。そして柔らかく微笑む。

「悠詩さんになら、話しても大丈夫そう」

人を信じ切つていて、そのような言い方が瘤に障る。急に何なんでしょう、この人。

「買い被らないでください。裏切らない保証はないですから」

必要とあらば、あつさりと裏切れますとも。

突き放すように言つたのに、緋明さんはまたおかしそうに笑う。

「信用できる人ほど、そう言つことを言つんですよ。逆に、自分を信じてください。なんて言つた方が、わたしは信じられないです

ね

そして一瞬、嘲りが混じる。口の片端を不自然に歪ませていた。

「大抵、そんな人ほど嘘つきなんですよ」

皮肉っぽい笑みを張り付けたまま、ぼそりと呟かれた言葉。彼女に似合わず、かなり寒々しいものだった。

「姉と、この屋敷について、ですか…。おもしろい話ではないですけど、構わないですか？」

首を傾げながら僕を見る。さっきの薄ら寒い気は無くなっていた。「話してくださいですか？」

つい訊いてしまって、緋明さんがプツと吹き出してから笑い出した。

「だって、拒否権はきっと無いんでしょう？それに、いざなは話さなくてはいけないことだから、無駄に抗つたりはしないですよ」

その声には先程の嘲りのようなものは欠片もなく、ただ僕の発言がおかしいと笑っている。

確かに、まあ…変かもしけませんね。自分から訊いたわけですし、答えなかつたりしても無理やり言わせようとはしてましたからね！」。けど意外だったのですよ、こんなにあっさりと良い返事をいただけるなんて。もつと渋るものがと思っていたのですから。

そんな心中を口には出さないで、じつと緋明さんを見てみた。少しでも“情報”を逃さないために。見極めるために。視線に気づいたのだろう、緋明さんは僕を見ると明るい笑顔を引つ込めた。

代わりに、目を伏せながら淡く笑う。

「では、お話ししますか。私達の生まれと、この家について」

11・3・緋明の焰と一人の姉妹（後書き）

前話から、早一カ月。

三日以内に……、とかいう心意気はどこに消えたのでしょうか…。なんて、ひとり逃避してみる作者です。

今回の話で11話は終わらせようと思つていたはずが、終わりませんでした。

いつも一倍までなら、更新しちゃえっ！とか思つたのに、三倍になりそなので止めました。

といふことで、11話自体はあと2話分はある予定です。

長らくお待たせしてしまい、すみませんm(ーー)m

今年中には『火の巫女編？』は終わらせられるよう頑張りますので、これからも読んでいただけたら幸いです。

11-4・緋明の名と一人の姉妹（前書き）

今回は悠詩ではなく、緋の視点になっています。
あらかじめ、ご了承ください。

同じ年、同じ月、同じ日に一人の赤子がこの世に生を受けた。それが、ことの始まり。

「わたし達は“双子”として、この家に産されました」

意を決して一言目を発したら、悠詩さんの表情が苦いものへと変わった。

「双子、ですか？」

女の子みたに可愛いお顔が歪められる。きっと、双子として生まれた者がどうなるのか知っているんだろうな。知らないでいてくれた方が嬉しかったんだけど……、仕方がないよね。

どうにもならないことを心中で苦笑しながら、わたしは頷く。
「はい。だから、運が悪かつたら私は死んでました」
これは誇張でもなんでもない、ただの事実。

本来、一人の女性から一度に産まれる子の数は一人。それを普通としてきた人々の前に、一人の赤子が産まれたらどうなるか。…喜ばれなどしない。むしろ、異質とされて忌み嫌われる。

“双子”は“忌み子”。あつてはならないモノたち。

だから、無かつたモノとして片方が消される。それが双子として産まれたどちらかの子供の運命。

なんの罪もない赤子を殺すことに否を唱える人は少ない。一人産まれてきたこと事態が罪であり、そうすることが正しいと人々は思っているからだ。たとえ声を上げた誰かがいても、逆にその人が非難を受けてしまう。だから、いつまでも繰り返される。罪無き……どこから、悪すら知らない赤子の死はなくならない。

そして誰もが、その行為は人を殺めることと同じだなんて気づかない。

「本当は一人目である、わたしが殺されるはずでした」

「けれど、巫女であるあなたは殺せない」

感情のこもらない声で悠詩さんが言つ。

暗に「巫女でなければ殺されていた」と言つてているのが聞いていてわかる。容赦ないなあ。まあ、実際そうなんだけね。

けど、少しだけ違う。

「正しくは、巫女の証である“色”を持っていたから殺されなかつたんですよ」

火の巫女を表す赤。髪と目にその色を宿していたから生きられた。神を信じ、崇拜するこの世界の人々は、神に仕えている巫女を殺すことではない。巫女は神に近い者とされており、巫女を傷つけることは神を傷つけることと同じだと思つてゐるから。

だから

「お陰で、姉が殺されそうになりましたけどね」

証を持たない双子の片割れに矛先が向けられるのは、深く考えなぐてもすぐにわかること。人々からすれば、一人じゃなくするためにどちらかを処分すればいいだけの話だからね。

「けれど、殺さなかつた。それとも殺せなかつたのですかね」

鋭い指摘。

やつぱり悠詩さんはすごい。悔れないな。最初から悔るつもりはこれっぽっちも無かつたけど、改めてそう思つた。

「後者の方が当たりです。誰一人として彼女を殺せなかつた。理由は……悠詩さんなら勘付いているんじゃないですか?」

聰い人だから、おおよその見当くらいはついているだろう。その確信を持つて訊いてみたんだけど、若干顰めつ面になつてるのはなんでだろ?

「……確かにないことを話すのはあまり好きでは無いのですが……。僕の見立てでは、メイさんもまた“巫女”だったのではないかな、と

わたしが思つた通り、眞実に近いことを答えてくれる彼を見て、

思わず感嘆してしまつ。

「…さすがですね」

普通の人なら、そんなこと思いつかないだろつ。忌み子達が巫女だなんて誰が思う？少なくとも、この世界の人間じゃ思いつかないんだろうな。

悠詩さんの場合、かなり聰い。ただ賢いだけではなく、聰くて頭の柔軟性がある。

けど、彼の解答では少しばかり不十分。

「悠詩さんが言つた通りです。メイちゃんもまた“巫女”でした。けれど、彼女は色を持つていなかつた。持つていたのは“力”だけ」

「そう、目に見える証をメイちゃんは持つていなかつた。だから殺されかけた。けど、まだ抵抗も出来ない彼女を助けたのはその“力”。

「刃を持つた人を、赤い炎が包んで焼いてしまつたらしいですよ」
恐ろしい光景だつたろう。目の前でいきなり人が焼け死ぬのだ。
それも、忌み子の片割れを殺そうとして。

「幼子の時は、神様が巫女を護つてくださるらしいですからね」「呆れた声音で悠詩さんが言つた。同情なんてものは全くない。それは誰もが知つてることだから、呆れたい気持ちもわからなくもない。けど、わたし達は例外中の例外だ。」

その人達は馬鹿ですか。なんていうことを心底呆れた目で訴えてくる悠詩さんに、わたしは苦笑するしかなかつた。

「仕方がないですよ。彼らは、メイちゃんが巫女だと思つてなかつたんですから」

普通は巫女は“色”と“力”的一つを持つて産まれてくるものだ。それなのに、メイちゃんは“力”は持つても“色”は持つていなかつた。

「まあ、わたしはわたしで“色”しか持つてないんですけどね」
その一言に、悠詩さんが眉を顰めた。

「どういう意味ですか…？」

訝しむよつた声に、「血葉のまんまですよ」と軽く息を吐いてから答える。

「わたしは田に見える証を、メイちゃんは田に見えない証を持つて産まれたんです。二人合わせて一人の“巫女”なんですよ」

わたしに“力”は無かった。

きつと神様の御加護があつたメイちゃんと違つて、わたしはあつさりと殺されていただろつ。“色”を持っていたから刃を向けられなかつただけ。色持ちの時点で誰も確かめようとはしなかつたから、わたしに力が無い事を知つている人はいなけれどね。

「なぜ、二人で一人の巫女だと言えるのですか？　たまたま片方ずつだけ持つて産まれたのかかもしれませんよ？　稀にそういう方はいますから」

未だに疑り深い眼差しを向けてくる悠詩さん。本当、頭の回転が速くて困っちゃう。コレはあんまり言いたい事じゃないのに。

思つていても、口に出さないわけにはいかない。仕方がない、ゆっくりとだが話し始めた。

「神様から頂いた名前が、同じだったのですよ」

名前というのは物心ついた頃に神様から貰つもの。といつても直接貰つわけではなく、ある日突然名前を思い出すのだ。思い付く、閃くつて言葉にすることもあるけど、わたしは思い出すの方がしつくつくる。

“今わたし”になる前の、ずっとずっと“昔のわたし”も同じで、その名前を受け継いでいるんだと思つていてるから。だからあって思い出すつて言つてる。

…と、あれ？　話が微妙にズレちゃつた？

ま、まあ、本題に戻ろうかな。

「名前は、一人一人違う名を神様から貰つものだというのはご存知ですよね？」

わたしの言葉に、心外だとでもいうよつた顔をした。

「この世界の常識ですからね」

子供が拗ねたような言い方に、わたしは笑つてしまつ。だつて、可愛いんだもん。

「そうですね。なのに、わたし達は同じ名前なんですよ」

笑いながら言つてしまつた、笑い事じやない事實を聞いて、悠詩さんの顔に衝撃が走る。

「……同じ、名前…？」

信じられないって顔。悠詩さんでもそんな顔するんだなあつて、笑いも引つ込めじつくり見てしまつた。驚いた顔してても可愛いなんて、美少女つて得するなあ。

決して口にはしてないのに、そんなことを思つた瞬間に睨まれた。おかしいな、口に出してないのに……。

「……」恐いですからその顔やめてくださいつー。

思わず涙目で叫んじゃつた。だつて、……本当に恐い。

抗議したお陰か、すぐに睨むのをやめてくれた。良かつたあと、ほつとしたのも束の間

「さつさと話の続きをくれませんか？」

「うう」コリ笑つて悠詩さんが言つた。

笑つてゐはづのその顔が恐いと思つたのは、わたしの氣のせい、じゃないよね……？

緋明さんから、不気味なこの家のお話を聞いた。もともと何があるんだろうなとは思つてましたけど、こんなに面倒くさい内容だなんてねえ……。

ため息を吐きたいのをこらえて緋明さんを見る。余計に深い息を吐きたくなつたのは言つまでもありません。

「物心ついた頃、わたしと姉は親たちに教えるよりも早く、お互に名前を教え合いました。その時初めて知つたんです。二人とも同じ名前なんだつて。音も字も同じ“緋明”だなんて、知つたときはびっくりしましたよ」

笑いながら言ひ田の前の少女を小突きたい。全く笑い事じゃないです。というか笑えないです。

名が同じというのは、その人達もまた同じ存在だということを表す。神が生きるもの全ての名をつけると言われているこの世界では、何かと同じということはあっても、誰かと同じ名前ということは無いに等しい。

「幼いわたしたちは、それを知つてもどうすることもできず……といふか、当たり前だと思つてたんですね。同じ名前つてあるんだつて思つてた、のに」

言葉を止めて、緋明さんが目を伏せる。そして短いため息を吐いた後、自嘲気味に笑つて話を再開した。

「バカですね。そのまま正直に親たちに言ひつてしまつたんです」その一言を聞いただけで、なんとなく察してしまつた。一人の名を知つた人たちがどんな判断をして、どんなことを一人に強要したのか。答えを聞かなくても彼女の顔を見たらすぐにわかりますとも。それでも、僕から言つ気はありませんけどね。

そんな内心を知つてか知らずか、緋明さんは僕の顔を見て苦笑した。……この顔を見る限り、絶対わかつていそうですね。僕ってそんなにわかりやすいのでしょうか？

少し考え込みそうになつたところで、緋明さんが口を開いた。
「さつと、悠詩さんはもうわかつてしまつたんでしょう？それでも、続きをわたしに話させるんですか？」

縋るような問ひには、ぞつくりと容赦なく答えた。

「もちろんですよ」

彼女の口から本当のことを聞かない内は、僕が考えたことは想像の域を出ない。僕が知りたいのは、眞実や事実です。自己満足な想像で終わらせる気は無いのです。だから、あなたに訊いているんですよ。

言葉にしない代わりに、ヒツヒツと微笑んでやつた。てつきり反論が返つてくるかと思つたのに、緋明さんは「それもやうですね」と素直に頷く。

「じゃあ、話の続きをしますか。……どこまで話しましたっけ？」

首を傾げるその仕草は、はたから見れば可愛らしく見えるんでしょうね。僕としては殴りたくなるだけですけどね。

「あなたたちの名前を馬鹿正直に、親御さんに話したところまでです」

「…………わたし、馬鹿正直について言いましたっけ？」

「ああ？」

少しばかりイラッとしたので、笑顔を浮かべたまま適当に返しておぐ。いいですよね、これくらい。仕返しの内にも入りませんよね？

一方の緋明さんはハテナマークを頭上にたくさん浮かべた顔をしてから、まだ若干不思議そうな顔をしつつも話を再開した。

「知つてしまつた親たちは驚き、恐れ、そしてわたしたちの存在をどうするか親族の方々と議論しました」

彼女たちはやはり“忌み子”だ。殺さなくては。

けれど巫女は殺せない。
ならどうする？

そんなとき、親族の中の一人は言った。

同じ名ということは、元は一人の巫女だったのだろう。ならば、一人に出来ない代わりに、存在を一つにすればいい。“色”ある者は表に、“力”あるものは陰に。陰は人目に付かないように隠せばいい、と。

「それからです。姉は、生きているのに存在を消された。名を聞いてから子供を公表するという決まりが、役に立つたみたいですね。公表されるまでは、親族以外誰一人としてわたしたちのことを知る者はいないから、隠蔽するのなんて簡単だつたでしょうね」

嘲るように鼻を鳴らす。その嗤いは、誰に対してもものなのでしょうかね。時々見せるその顔が苦しそうに見えるのは、僕の気のせいですね？

「神様は、“同じ存在”だということを認めさせるような名をわたしたちにくれました。けれど、それは“巫女”的なんですね。だから、わたしたちは一人で名前を分け合つたんですね」

「色を表す“緋”をあなたに。お姉さんの方には“明”を、ですか……？」

「そうです。わたしたちは緋明という一人の巫女ではなく別々の人間だと、自分たちに言い聞かせるために、ですかね」

そう言いながら穏やかに微笑む緋さん。それを見て、なんだか無性に意地悪したくなかった。

「自分たちが一人の人間だつたら……とは、思わないのですか？」
不意の質問に、一瞬面食らつた顔をした緋さんは、すぐに微笑んだ顔に戻る。

「思わなかつた、と言えば嘘になります」

彼女の答えに、つい、田を細めてしまひ。はつきりしないその言葉が僕を軽く苛立たせた。

しかし、答えはそれだけで終わらない。けど…、と緋さんが続ける。

「もし、わたしたちが世の中で言ひのりの正常で産まれていていれば、どちらかはいなかつたわけでしょう？　なら、良かったかなつて思うんです。明ちゃんに、会えたから」

嫌なのは、明ちゃんが表に出れないことですかね。逆だったら良かったのに…。そう言つて笑う顔は、最後には苦笑いになつていて。「明ちゃんが姿を現さないのは、誰かに双子の存在を知られないようにするためです。バレてしまつたら、今までの苦労は水の泡ですからね」

話しきつたとばかりに息を吐く、その顔はただ穏やかだった。屈託もなく、何の混ざり気のない、そんな表情が似合つと彼女の顔を見ながら僕は思う。顔のつくりもあるんだろうけど、根本となる性格みたいなものを覗いたとき、思わずにはいられない。

自嘲したような笑いよりも、春の日差しのような温かくて柔らかい笑顔の方が似合つ、つて。

と言つても、そんな顔させたのは僕なんですけどね。細かいことを気にしてはいけません。

「あなたのお姉さんを見なかつた理由はわかりました。ところど、ここに人気があまり無い理由はなんですか？」

まだもう一つの疑問は解かれていないんですよ。しゃばくれないでくださいね。

そんな思いを込めて、雰囲気を変えるためににっこりと笑う。なんだか、話は終わり。みたいな雰囲気でしたが、流れさせんよ。流れされてたまるものですか。

すると緋さんは「あ、そうでしたっ！」と慌てて話しつづくとする。…もしかして忘れてたとか言ひませんよね。言わなくとも、そんな感じではあります。

ボケ……失礼しました。天然な緋さんは話し始めようと口を開こうとして、結局閉じてしまった。訝しげに見ていると、相手の目は僕の顔よりも下の位置に向いていることに気が付く。そして視線を追っていくと、緋さんが口を閉じた理由らしきものが目に入つた。

「…お目覚めでしたか、姫様」

「……」

いつの間にか、姫様が目を覚ましたらしい。といつても、反応の鈍さから見て今さつき起きたばかりなのだろう。目がまだ半分位開いてないのもその証拠だ。

暫くして目を覚ましたらしい姫様はゆっくりと起き上がる。そして僕の方をジツと見つめてきた。視線に晒された僕は当然ながらドキッとするわけですが、甘い展開になるはずもない。

「…悠詩、だっこ」

部屋に戻るから連れて行けということだら?。これのどっこが甘いですか?

「はいはい」

諦めにも似た返事をして、彼女を横抱きにしながら立ち上がる。不安になるほどに軽い身体はすぐに持ち上がった。

「では、失礼します」

話の続きを聞きたいという名残惜しさはあったが、頭を軽く下げて退出を伝える。さすがに、姫様の前であんな話はしたくないですからね。

そんな僕の内心を悟ったのでしょうか。先程の話を匂わす発言もせず、緋さんは別の質問を姫様にする。

「夕食はどうしますか?」

「食べる」

「なら、もう少ししたらお部屋に持つて行きますね」

そんな当たり障りない会話をして、僕達は部屋を出た。

*

「だそうですよ」

部屋を出て、十字になつた廊下を横切るときに僕は呟いた。もちろん、誰がいるかわかつていてのことだ。

「…気づいていたの？」

物陰に隠れていた誰かは、少しの間が空いた後に訊いてきた。足を止め、進行方向を向いたままの僕は口を開く。

「気配には敏感なんです」

それだけ言って、その場から去つた。

一度も振り向かず、視界に收めようとも思わなかつた僕は、隠れるように立つていた人物がどんな顔をしていたのか知る由もない。

11・5・緋明の名と一人の姉妹。（後書き）

読んでください、ありがとうございます。

続けて投稿できれば良かったのですが、またしても遅くなりました。
すみません…。

次はもうと日数が経ちやうな気がしなくもないです。
これからも、温かい日で見ていただけたら幸いです。

12・1・明と成悠（前書き）

12話は悠詩以外の視点になります。

夜も深くなつた頃、アタシは外に出た。といつても屋敷の庭だけど。

ふと見上げるてみると、朝と昼を照らすお日様の代わりに、淡い光を纏いながら暗闇に浮かぶお月様とお星様が目に入る。決して強すぎない、優しい明かり。それくらいの明かりが、アタシには丁度良い。

「ねえ、いつまでそこにいるの？」

唐突に、姿を見せない誰かに訊いてみる。

さつきから、近くに気配があるのに気がついていた。それも、普通の人間じゃない気配。屋敷にいるときからずっとついて来るそれに、いい加減無視するのも煩わしくなつたアタシは話しかけのだ。返事が返ってきたのは随分経つてからで、高すぎず低すぎない、耳に心地良い透き通つた声が背後から聞こえた。

「あなたが、片割れ？」

声につられて振り向くと、そこにいたのは銀色の髪を持つこの國のお姫様。月の明かりを受けて、神子の証であるその髪はうつすらと煌めいている。

綺麗だと一瞬見とれると同時に、思つていたのと違う人物がいることに少し驚いた。

「ええ。その表現が正しいかはわからないけれど、もう一人の“緋明”ではありますね」

驚いたことがバレないよう、アタシは平静を裝つて言葉を返す。すると、「そう」とだけ彼女は言つた。自分から訊いてきたくせに、それ以上は口を開かない。

けれど、そういう人だということがわかつてゐるから、狼狽える

こともなければ怒りが湧いて来ることもない。代わりに、疑問に思つたことはあつた。

「神子様は、お一人でここに来たの？」

まさか彼女だけでアタシのところに来るなんて思つていなかつた。だつて、悠詩とかいう従者がいつでもぴつたりと張り付いているんだもの。きっと神子様が一人だけで出歩くなんてないだらうなと高を括つていた。

ところが、アタシの質問には答えずに少女は違うことを言つ。

「成悠」

「なゆ……？」

いきなりの単語に、彼女の意図が読めないアタシはただ繰り返した。神子様はコクリと頷いた後に、幼い子供のようにどこかズレた主張をする。

「わたしは“成悠”。“神子様”って名前じゃない」

まあ、言いたいことはわかる。わかるんだけどね、目の前にいるのは神子様だ。アタシたち巫女よりも神に近い存在。そんな御方を、呼び捨てにする勇氣はさすがのアタシにもないよ？

「では、成悠姫様とお呼びしますよ。それで文句ないですかね？」
訊ねると、少女はまたコクンと頷く。子供みたいな仕草が妙に似合つていて可愛い。

「さつきのお話の続きですが、成悠姫様はお一人で来られたのですか？」

聞きそびれていたことを再び訊ねると「そう」と頷く。

「こんな遅い時間に、よく侍従さんが夜のお散歩を許してくれましたね」

「……」

アタシの言葉に、何の返答もしないお姫様。それどころか、スッと視線をずらしたよつ！？ なんだか嫌な予感がする。

もしかして…

「何も言わぬいで出てきた、とか…？」

今度は無言のまま口クンと頷き、肯定する。

「つわ、予感的中だ。つい、片手を額に当たってしまう。

見るからに過保護そうで性格悪そうな人に内緒で、部屋から抜け出してきたなんてやるなあ。目聴そうだったから、気づかないなんてことはなさそうだし……後々、面倒くさそうね。

頭が痛くなるようなことを考えていると、不意にお姫様がアタシの服の袖を引っ張る。何だらう？ と思つて視線を向けると、丁度よく目が合つた。

「わたしの、せい？」

「はい？」

「いきなり何を言つてるの？ 思わず聞き返しそうになつたけれど、すんでのところ言葉を飲み込んだ。つてか、そんな目で見られたら、何も言えなくなつてしまつではないか。

「なんか困つてゐる。それは、わたしのせい？」

表情はぜんぜん変わらないのに、目だけは不安を訴えていた。なんだか、弱いものいじめしている気分になる。アタシ悪くないのになあ。

怒る氣も叱る氣も元々なかつたし、そんな目で見られたらねえ、下手なことは言えないわ。そう思つて、苦笑した。

「少し困つてますかねー。成悠姫様が誰にも言わずに来てしまつたようですから」

よくわからないらしく、お姫様はコテンと首を横に倒す。

「ダメなこと？」

「駄目といふか、侍従さんが心配するでしょ？」

「しんぱい？」

「どうしたのかな、大丈夫かな、無事かな……とか、相手の安否を気遣うこと

「それは悪い」と？

「自分が心配する分では良いですけど、誰かにさせるのはあまり好みくはないですかね」

言い終わると、暫くしてから「気をつける」という声が聞こえた。本当に気を付けてほしい。彼女のためというか、周りの人のために。「ところで、なぜ成悠姫様がここに？」

ずっと聞きたかったことを口にしてみる。キヨトンとした顔をした後、至極簡単な言葉でお姫様は答えた。

「あなたと、お話するため
ん、まあ、そうですよね。

「なんのお話です？ 生憎と、外のことはよく知らないので、提供出来るお話はないですよー」

おちやらけながら言ってみたけれど、その言葉は嘘じやない。産まれてから一度も、屋敷の敷地以外に出たことがないんだから、知らなくて当たり前だ。

だけどお姫様は首を左右にフルフルと振る。どうやら、アタシが言つたことは、彼女の聞きたいお話ではないらしい。「じゃあ、なんのお話ですか？」

外を知らないアタシにどんなお話を聞きたいのかなんて思いつきもしなかつたから、素直に訊いてみた。その方が手っ取り早くて良い。

アタシに促された少女はゆっくりと口を開く。

「あなたが、人を殺した理由」

可愛らしきお姫様の口から、そんな物騒な言葉を聞くことになつた。

生きているもの殆どが寝静まる頃。真つ暗な空に光を纏つて浮かぶのは、一つの月と、数多の星。それらは、隠してきた何かを明るみにするかのように、辺りを照らしていた。

「あなたが、人を殺した理由」

騒音がない暗闇の中で、その言葉が嫌になるくらいハッキリと聞こえた。

「何のことでしょう?」

軽く笑いながらとぼけてみる。白々しいのは自分でもわかっているし、誤魔化せるとは思っていないけど一応、ね。

けど、可愛らしいお姫様は予想より遙か上のことを見てくれた。

「六年前、あなたが人を燃やした理由」

あらら、真面目に返してくださいましたか。「とぼけないで」とか言われるものだとばかり思っていたから予想外。にしても、具体的じやないかしら?

「よく知っているわね。緋はそのことについて話していなかつたはずだけど?」

悠詩という侍従と緋の会話は聞いていたけど、その中で人殺しの話なんて出なかつたはずだ。そもそも緋は、アタシが人を殺したことを知らない。もちろん、どういう風に殺したかなんて知るはずもない。

なのに何故、彼女は知っているのか。

話の出所を不思議に思つていると、田の前の少女は思いもしないこと言つてくれた。

「みたから」

「…はあ?」

一瞬、相手が姫様であり神子様であることを忘れて、そんな聞き方をしてしまった。しかしお姫様は「ううと大して……どころか、全く気にしていないらしい。無礼に当たる物言いにも表情一つ変えない。

少し微妙な気持ちにはなるものの、それはそれで丁度いいんだと自分に言い聞かせる。どうせさつきから敬語なんて使ってないし。良いと思わなくては、この姫様相手にやつてられない気がした。

「見たとは、どういう意味？」

「そのままの意味」

お姫様の声は人を遊ぶような聲音は少しも混じってはいなくて、あまり前とでもいうように言つてくれる。……いつそ、馬鹿にしてもらつた方が良かったかもしれない。その方が希望が持てた。きちんと意味を説明してくれる、という希望が。

しかし、どんなに待つてもそれ以上の返事は来ないし、口を開きそうもない。だから、ため息を吐きたくなるのを堪え、質問を変えた。

「あの日、あなたはここにいなかつたはずよ。それなのに、どうやって見たというの？」

6年前のあの日、アタシたちの一族以外はここにいなかつた。もし居たのなら、気配でわかつたはずだ。

「その場に居なくとも、みることははできる」

「どういいうこと？」

何を言つているのか。怪訝に思つて、反射的に低い声を出してしまう。そんなアタシを気にすることなく、お姫様はお話になつた。

「全て視れる。過去も今も未来も全て。対象の何かを見ているとき、望めばその全てを視れるの」

欲しかつた答えを貰えたといつのに、アタシは茫然とてしまつ。嘘でしちゃ?

そう思つてゐるのに、何故か理解してゐる自分もいた。だつて、
彼女は“神の子”。何が起つても、どんな能力が有るつとも、決
しておかしくはない存在。

…理解はしても、気持ちの整理が出来るかどうかは別問題なわ
けで。

整理しきれない頭のまま、口を開いた。

「何を、あなたは見ているの？そして知つてゐるの？」

アタシの矢継ぎ早の質問に、姫様はきちんと返事してくれた。感
情を読み取れない表情と声音で、事実だけを話してくれた。

「さつきも言つた。全て視れる。あなたが何をしたのか知つてゐ
あなた達がどうなるのかも知つてゐる」

「なら、アタシから理由を訊かなくてもわかるんじやない？」

彼女が知つてゐるはずなのに訊いてくることが癪に障つて、皮肉
っぽく言つてみた。自分で言つといてなんだけど、腹立つわ、この
言い方。

気付かないのか、気にしないのか、姫様はアタシの態度に反応し
ない。代わりに、ふるふると首を左右に振つた。

「見るだけで、言葉は聞こえないし、聴くこともできない」

「えつ？」

意外な言葉に僅かに目を見開く。この流れからして、てつきり何
でも出来るのかと思つていた。

そんなアタシの動揺を感じたのかどうかわからぬけど、珍しく
姫様から話す。

「私が聴くことができるのは“今”だけ」

それつきり、彼女は口を閉ざした。

呆気にとられていたアタシは、すぐに我に返る。そして、ぽつり
と言葉をこぼした。

「…人を殺した理由なんて聞いても楽しくないでしょ」「元

諦めにも似たため息を吐きながら、彼女を見る。すると何を勘違
いしたのか、首を傾げて予想外のことと言つてくれた。

「わたしにそんな嗜好はない」

「大抵無いわよ」

こんなに可愛らしい少女が、しかも自國のお姫様が、人殺しの理由なんて聞いて喜ぶような趣味があつたとしたら、國民が号泣するわ。さすがのアタシも嫌よ。

想像してしまつたのが良くなかった。げんなりした顔を向けることとなるが、気にするはずもない姫様は無表情のまま言つ。

「理由を知りたいだけ」

「……」

何を、とは訊かない。そんなのさつきから話題に出ているんだから、わざわざ考えなくてもすぐに思いつく。

「……なぜ、知りたいの？」

その理由が、どうしてもわからなかつた。聞いたところで楽しい話では無い。人殺しの話を聞いて喜ぶような特殊な趣味のお持ちなわけではないのは、さつきの話を聞く限り保証できるだろう、たぶん。

「理由がなくちゃ、ダメ？」

くりんとした大きな瞳がアタシを見る。濁すような物言いが珍しいなと思いながらも、アタシは言つた。

「駄目ではないわ。けど、理由があるなら知りたいだけ」

「同じ」

すぐに返つてきた言葉というか単語に、「えつ？」と戸惑つてしまふ。簡潔すぎなお姫様の言葉は、時々意味がわからない。

「わたしも、ただ知りたいだけ」

「……」

またしても、アタシは沈黙するしかなかつた。これにどう反論しろと？

可愛らしいお姫様は、アタシをジッと見つめて視線を逸らさない。今更逃げるのも後味が悪そうだ。

はあ…。と一つのため息を吐いてから覚悟を決める。いつもなつた

ら腹を括るしかない。

「では、お話ししましょつか」

面白くもない、人殺しのお話を。

12・3・題と成悠（前書き）

少し長いです。

炎は望む全てを焼いてくれた。それも器用に、人だけを。

「やはり、お前等は忌み子だったのだ」

死に際、一人の男がそんなことを言った。

人を炙る炎とは対照的に、その男を冷えた目で見る。つまらない。どうせなら、命乞いとかしてくれたらよかつたのに。

「あの時、殺していれば……！」

怒り狂つた表情で男はアタシを見る。その目には確かに殺意と憎悪を感じた。

ああ、不快だわ。

男を見ても、嫌悪しか感じなかつた。同情も哀れみも、何一つアタシの心には無い。

人形のように微動だにせず、その様子をただ眺めていた。醜い肉親が炎に包まれて、ゆっくりとその熱で炙られ溶かされ、死んでいく姿を……。

*

「殺した理由は簡単よ。嫌いだから殺しただけ」

あつさりと殺害動機を話す。嘘は言つていない。幼い頃から、親

と位置付けられている人間も、その他の人間も嫌いだつた。

「あの人達は、アタシたちのことを忌み子だと言つたわ。なのに、巫女だから殺せない。囮つておくしかなかつたアタシたちを、いつも怪物でも見るような目で見ていた」

「あるのは憎悪と恐れ。忌み子が巫女だなんてどうしようもなかつた。殺すことなどできない。だからこそ、いつか何かが起ころうではないかと、誰しもが囁いていた」

「だから、災いを起こしてあげたのよ。アタシたちを知つてゐる者全てが、炎に焼かれて死に絶えるように」

「薄ら笑みを浮かべながら言つた。自然と笑つてゐるのか、作つて笑つてゐるのか、自分でさえもわからない」

「なぜ、燃やしたの？」

ジッとアタシの目を見ながら、お姫様は問う。彼女しか持ち得ない灰色っぽい瞳に、全てを見透かされそうに思えて、思わず目を逸らした。

「…効率が良かつたのよ」

たくさんの人を殺すのは一度にやつた方が楽。ナイフなどの刃を使つて一人一人の命を絶つのは、骨が折れる作業だ。それよりだつたら：

「巫女の能力で、一度にたくさんの生を絶つ方が楽だつた？」

「そういうこと」

誰かにバレることもない。だつて、アタシの存在を知る人なんて、一族以外にいないんだもの。

「各地で人が燃えたのは、あなたの仕業…」

お姫様がぽつりと呟く。アタシを見ていた目は、伏せられていた。

「あら、騒ぎにでもなつていたの？」

まあ、当たり前かもしれない。原因不明の焼死体……いや、何も残らないくらいに燃やしたのだから、遺体が出て来るはずはない。きっと、燃える誰かを見ていた人がいたのだろう。

運悪く目撃した人には申し訳なく思う。奇声を上げ、皮膚が溶か

されて死に逝く姿は、田も当てられないほどヒドいモノだったから。

「わたしは知らない。けど、悠詩が調べてた」

「…悠詩？女顔の侍従さんのこと？」

アタシの声にお姫様は少し悩んだ素振りを見せた後、コクリと頷く。

いろいろ調べているのね。国政に関係を持つ人なんかしら。考えるとため息を吐きたくなる。そんなのが嗅ぎ回っているのなら、面倒事にでもなりそうだ。

「殺した理由、他はないの？」

違う方に思考を持つて行つていると、お姫様の声で呼び戻される。出来ることなら、もう少し逃避したかったかも。

「無くは、無い。ですかね」

憎いのは元から。物心ついた時から、緋以外は敵だった。死を与えようと思つたきっかけは…

「愚か者たち、緋に刃を向けようとしたのよ」

大切なものを、奪われそうになつた。

アタシは色を持たない代わりに能力を持つていた。

あの子は能力の代わりに色を持つていた。

けれど周囲の者達は、あの子が能力を持つていないのに気が付いていなかつた。

あの日までは。

「誰に唆されたのかわからぬけど、能力の無い緋を殺そと企んだのよ」

巫女とはいえば、能力の持たない緋は容易く殺すことが出来る。神が護るのは色ではなく、能力。色持ちでしかない彼女は、人間で

も簡単に手を下せる。

「なぜ、緋が殺されそうになつたのかも、どうして能力が無いことに気が付いたのかも、アタシにはわからないわ」

けれど、気づいたら人は燃えていた。自身のために使えないはずの“神の力”を使って、彼らに制裁を下した。

自分でも深く覚えていない。

覚えているのは

皮膚を溶かしながら焦がしながら、いたぶるようにゆづくりと対象物を燃やしていく炎。

驚愕に見開かれた目と恐怖に翻え我を忘れた表情と、耳を塞ぎたくなるような人の叫び声。

怨み、憎悪、怒り、様々な負の感情を混ぜた表情を浮かべながら、狂つたように叫ぶ父という存在らしい男。

その全てを、燃やす炎とは正反対な……温かさを欠片も感じさせないような冷えた目で見ていたアタシだった。

そろそろ侍従さんがお姫様探しに来る頃だろ。鉢合わせなど絶対にしたくないから、アタシも部屋に戻るうか。

そんなことを思い、「では、失礼致します」と一寧にお辞儀をしてから元来た道を辿るとする。

しかし

「望むなら、願いを叶える」

体を半回転し、一步を踏み出そうとしたところで、お姫様の声が掛かった。

いきなり、何を言つてんだ？

そう思つのは仕方がないと思つ。

背を向けていた方に、また体を向け、突拍子も無い」と言い出した銀髪の少女を見る。その顔は相変わらず無表情で、何を考へているのかわからなかつた。

「いきなり、何？」

「望むなら、願いを叶える」

訊いてみても、その一点張り。会話する能力は彼女には無いようだ。

仕方がないから別の質問をする。

「対価は？」

叶えてほしい願いが無いわけではない。しかし、何も無しにそんなことを言い出すはずがない、と思つたから訊いた。

すると、「するどい」と言いながら微かに笑う。ずっと無表情だった顔が、少しだけ動いた瞬間だった。

「あなたの血でいい」

「ち？」

思わず聞き返す。

ちつて、もしかして血のこと？

よく分からずに相手を見ていると、さつきよりも笑みを深くしたお姫様がアタシを指をさした。正しくは、アタシの身体を。「あなたの身体を流れる、真っ赤な血。あなたを縛り、神の力を宿す、その血がいい」

今まで表情を変えなかつた少女が、魅入られるほど可愛らしい笑みをアタシに向ける。

しかし、声からは感情が読み取れず、話の内容も相まって、見とれるよりも先に恐いと思った。知らず、足がすくむ。

「なぜ、血を…？」

少しばかり声が震えた気がした。気がしただけであつて、実際どうであつたかは自分ではわからない。

「それ以外の対価はいらない」

お姫様はと、理由は答えずにそれだけを言つ。

自分の望みが叶うといつ、甘い誘惑。対価は、己の血。恐くないわけじやない。むしろ、足がすくむくらい恐い。対価そのものとこより、神子である一人の少女に恐れを感じた。けど

「それで願いが叶うなら、血でもなんでもあげるわ。その代わり、必ず叶えて」

本当に願いが叶うのなら、それぐらい、アタシにはほどあつてことない。使えるものなら、何でも使う。それが例え、偉大なる神子様であろうとも、だ。

アタシが条件を飲み込むと、お姫様は笑みを消し、無表情に戻つてから言つた。

「約束。成悠の名に誓う」

その言葉に耳を疑いそうになつた。

名に誓うことは、こちらとしては相手を信じられる行為だ。しか

し、誓つた本人にはかなりの危険がある。誓いを破つた場合、その人の心臓は活動を停止してしまう。

つまり、その約束に自分の命を賭ける、と彼女は言つたのだ。

「神子であるあなたが、なぜそんなことを……？」

正直、馬鹿じやないのかと思つ。巫女とはいえ、こちらはただの人間だ。そんなものに、信用させる為とはいえ、なぜ命を賭ける？なぜ、わざわざ危ない橋を渡るのだ。

アタシの内心を知つてか知らずか、事も無げにお姫様は言つ。

「今のわたしは成悠。神子としてじやない。産まれ落ちた人として誓う」

そして「気に入つたから」と、少女はまた僅かに笑つた。

「あなたたちの生まれと終わり、珍しい。それに、緋も明も氣に入つたから」

そう言つて無邪氣に笑うお姫様は、とても綺麗だった。月明かりが丁度良く銀色の髪に反射し、田が痛くならないくらいに優しく煌めぐ。

華奢な身体と可愛らしくも美し容姿、地面につきわづなほど長い長い銀色の髪。月に照らされた神子様は、より優しく、そして綺麗に見えた。

幻想的なその姿を、暫くの間、時も忘れてアタシは眺める。

「もうすぐ、始まる」

呴いた少女の声も言葉も、夢心地なアタシの耳には届かなかつた。

12・3・明と成悠（後書き）

読んでくださいり、ありがとうございます。
本当にありがとうございます。嬉しいです。

さてさて、あと3日で一区切りつくのか。考へてゐる本人が一番不安ですが、目標達成のためにも努力しようと思ひます。

これからも、お付き合いいただけたら幸いです。

13・優里と彼女。（前書き）

悠詩視点と優里視点になります。

全く、何をしていたんですかね。

布団の中で眠る姫様を見て、深いため息を吐く。すやすやと眠っている姿はとてつもなく可愛いのだが、先の迷子事件のせいでのみたいに素直に愛でることができん。

外出をしていた優里や都夜から情報をもらうために、姫様を残して部屋から少しうけた。そりやあ、そうですとも。さすがに姫様の前であんな話はしたくないですからね。

誰も部屋に入れてはいけませんよ。勝手に部屋から出るのも駄目ですからね。そう言いつけてから部屋を後にしたのに、帰ってきたら姫様の姿がないんですよ！

「姫様」と呼んでも「成悠」と呼んでも返事が全く無い。もしや、誰かが連れ去ったのでは?と一瞬思つたが、優里からも都夜からも報告が無いのをみれば、それは無いだろうと考えを打ち消す。そうすると、姫様が一人で部屋から出て行つたという考えが妥当で、急いで探しに行きましたよ。

「わかつたつて、言つたのに…」

誰に言つわけでもなく、ポツリと呟いた。

僕が注意事項を話した後に「わかりましたか?」と確認すると、「わかつた」と確かに頷いたんです。だから、安心して部屋から出たというのに…

「…油断するんじゃなかつた」

かなり後悔している。捗してもなかなか見つからない姫様。やつと見つけても、迷子の自覚は無いわ、叱つてみても話の半分も聞いていなさそだわ……正直言つて疲れました、はい。

何していたんですか?と訊いても「話してた」とした答えず、誰と?と訊いても「内緒」としか言わない。

内緒と言つた以上、彼女が話さないのは経験上知つてはいる。だが

ら大人しく引き下がりましたけど、疑問には思いますよ。

一体、誰と話をしていたのでしょうか……？

いろいろと考えを巡らせていると、トントンとノックの音が聞こえた。

こんな夜に誰だと思つていると、ノックをした人物は襖を少し開けてこちらを覗く。僕が起きていることに気が付くと、手招きをしてきた。

姫様の側を離れたくなくて無視しようと思つたが、後々厄介なことになりそうなのに気づき、仕方がなしに部屋を出る。

襖を締め切つたところで、不機嫌を隠しもせずに手招きをした人物を睨みつける。

「何の用ですか、優里」

目の前に立つ天使様はビクつくこともなく、ただ微笑んだ。

*

「わざわざ、名で誓いを立てましたか……」

自分にしか聞こえないくらい小さな声で呟く。

なんで、そんなことしたんですか。どういう意味か分かつていてやつたんですか。と今回ばかりは本人に問い合わせたいところです。

すやすやと可愛い寝息を立てている成悠様を、ついつい恨めしい目で見てしまいます。けれど、子供のようなその寝顔を見てしまうと、とてもじゃないですけど起こせません。問い合わせるなんて以外です！

「…何を誓つたんですかねえ…」

成悠様の身体に浮かぶ複雑な紋様。これは、名で誓つたときで起きるモノなのです。普段は見えないソレは、人間では無い私には視ることができます。

何かしらの異変を感じて成悠様の元に来てみれば、最初に田に付いたのがコレですもん。

幸いなのは、悠詩くんが気付いていないことです。そうじやなきや、もつと面倒なことになつていそうで……考へたくないです。顔は可愛いのになぜか恐いんです、悠詩くん。

文字を綴つたように見えるその紋様は、薦のようになつて成悠様に絡みついている。誓いが成されたときは消えますが、成されなかつたときはソレに埋め尽くされ、挙げ句、魂を食べ尽くされてしまします。

視える私には、少しキツイ光景です。

「なにやら、困つてこるようだな?」

私と成悠様しかいない部屋の中で、どこからか聞こえた声。不審に思うのが普通かもしねないですけど、馴染みある声だったので大して気にしないで返事しました。

「困つてますよー。なんで、成悠様はこんなことをしたんですかね」少々適当感を出しながら言つてみると、「さあな」という返事が返つてきましたよ。その答えにわざと半眼で相手を見てやります。

「なにが、さあな、ですか

“彼女”は知つているはずなんです。といつか、知らないはずがないんです。それなのに、はぐらかそうとしたんですから、半眼で見させてもらいますよー。

わかつてゐるんでしょうね。彼女はフッと鼻で笑いながら言つました。

「我からすれば、どうでもよいからな

確かにそうかもですけど……、少しほんとは関係あるんですよ？自覚してくださいです。わかつてゐるくせに、彼女は気にしないのです。どうしたら、そのひん曲がった性格直るんですか。

そう思つたりもしましたが、今更です。直るはずがないのは確認済みです。

「……そなた、我に対して少しばかり当たりが厳しくはないか？」眉を顰めて拗ねたように言つ彼女を見て、そのことに初めて気づきました。よくよく考えてみればそうかもです。なんででしょう？不思議に思つて理由を考えてみるもの、やつぱりわからんないです。

「……まあ、いいだろ？。それより、あの子のことは聞かなくともよいのか？我は長居できぬぞ」

「あの子……？ああ、成悠様のことですか。

「教えてくれるんですか？」

さつきまで渋つてたのですよね？といつ問い合わせも込めて訊ねると、心外だとばかりに口を尖らせた。

「教えないとは言つてない。そもそも、話す氣がなかつたらわざわざでこないぞ」

それもそうかもです。

「と言つても、言えることと、言えぬことがあるがな」

「それは仕方がないです。あなたには“縛り”があるんですから」すつぱりと答えると「まあな」と彼女は苦笑した。

そして成悠様について話し出す。

「あの子は“成悠”の名で誓いを立てた。“神子”として誓つたわけではないのだから、そんなに氣にせずともよいと思つたわ」「けれど……」

成悠様が誓いをしたのは確かで、それに背いてしまつたら大変なことになつてしまします。意図的に破らなくて、万が一といつこともあるんですから、やつぱり、心配です……。

「成悠様は、なぜ誓いを？」

訊ねると、彼女は少し悩むよつた素振りをした。そして「詳しくは言えないが」と前置きをしてから話し始めた。

「『』の一人の巫女については知っているか？」

「はい」

緋さんとメイさんが双子なのは知っています。メイさんの“メイ”には“明”を当てはめるのも、一人の名が緋明だということも、その意味も。

「色を持つ娘と、能力を持つ娘。一つ生まれるばずが、二つ生まれてしまふたことで、人間は一人を隠してしまつた。：理由は言わずとも、わかつてゐるだらう？」

問われて、私は小さく頷く。それを確認すると、彼女はため息を吐いた。

「いつの時代も、人とは愚かだな。まともに育てれば、ああはならなかつたろうに」

侮蔑ではなく、呆れの表情を浮かべる彼女は、少し悲しそうにも見える。

「能力を持つた娘は、人間を愛さない。己の半身である妹しか、この先も愛することはないだらうな」

それは、巫女として致命的なこと。巫女の力はこの世界の人々を助けるもの。まず無条件に人間を愛せない限り、その力を誰かの為に使つたりすることは難しいことです。

特に欲深い人間は、その力を自分の為だけに使おうと企んでたりしますしね。

「能力を持つ娘は“妹を守りたい”と思つていた。あの子は、その願いを叶えると約束をした。そして、その約束を必ず守ると、名に誓つたのだよ

「なんで、そんなこと……」

聞いても、納得できるものではなかつたです。むしろ、余計に理解できません。なんで、自ら危ないことをするんですか。たかが、約束ごときで……。

一人でモヤモヤしていると、彼女が嘆息した。

「詳しく述べは、我にもわからん。ただ、あの子は未来を視たようだ」

「未来を……？ それは明さんの、ですか？」

「そこは誰とは言えぬ。だが、あの子は馬鹿ではない。とだけ言つておこう。まあ、ちとやり過ぎな気もするがな」

彼女は嘘をつかないですから、その言葉は信じられます。けど……

…それでも、心配なのです。

しょんぼりしていると、彼女が私の頭をクシャクシャと撫でた。おかげで髪がグシャグシャに……。この髪意外と絡みやすいのに、どうしてくれるんですか。

涙目で撫でた張本人を見ると、彼女は優しく笑つた。

「そろそろ時間だ。またな、優里」

それだけ言つて、いなくなつてしましました。

あなたは、何を視たのですか……？

再び私と成悠様だけになつた部屋で、一人不安を抱きながら愛おしい少女を眺める。

その不安は無くなることなく、日々大きくなつていつた。

13・優里と彼女（後書き）

読んでくださった方、くださってる方、これからも読んでみようと思つてくださつている方（最後のは願望です）、ありがとうございます。

久しぶりの作者です。

なんだか、視点変更が多くてすみません。読みにくいでしょうが、お付き合いでいただければ嬉しいです。

さてさて、今年中に終わらせよつと思つている『火の巫女編？』についてです。

…正直言つて、終わる気がしません。ギリギリまで粘りますが、終われなかつたらすみません。

予定では、あと一話か一話分くらいです。それ終わつたら、緋と明の人物紹介もあとがきでやらせていただきます。

という報告でした。

長々とすみません…。

そして、よろしくお願ひいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3085x/>

はじまりの物語(仮)

2011年12月30日23時46分発行